俺、仮面ライダーレーザーになります。

ゆうちゃんEX

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校生、三条貴理矢は、ある日二人の幼なじみと共に不思議な事件に巻き込まれる。そこで、謎の女性からドライバーとガシャットを受け取り、人々を守るために仮面ライダーレーザーとなって人類の脅威と戦う。

「ノリノリで行くぜ～。一速、変身！」

《アイム　ア　仮面ライダー！》

ウイニングランを決めるのは俺達だ！

目次

俺、変身します。／Ｉ，ｍ　ａ　仮面ライダー ―― 1
俺、初戦闘です。／Ｆｉｒｓｔ　ｆｉｇｈｔは突然に ―― 14
俺、生活が一変します。／Ｃｈａｎｇｅする日常 ―― 23
俺、宣戦布告されます。／Ｎｅｗ　Ｓｔａｇｅの幕開け ―― 33
俺、新しい戦士と出会います。／現れるＮｅｘｔ　Ｃｈａｌｌｅｎｇｅｒ ―― 41
俺、心強い援軍を得ます。／ＢＡＮしたアイツがやってくる ―― 54
俺、決意を新たにします／史上最大のＩｎｖａｄｅ ―― 67
俺、決戦です／Ｓｏｍｅ　Ｌｉｅの極意！ ―― 76
俺、戦いを終えて／動き出すＳｔｏｒｙ ―― 92
俺、部活動を始めます／不揃いのｍｅｍｂｅｒｓ ―― 96
俺、困惑します／ままならないＴｒｏｕｂｌｅ ―― 104
俺、新たなる戦いの予感／Ｈａｐｐｎｉｎｇなガシャット ―― 109
俺、慣れない戦い／ｆａｉｌｉｎｇな俺 ―― 113

俺、変身します。／I，ｍａ　仮面ライダー

春の桜が美しいピンク色の花弁をこれからの学校生活に胸を踊らせる学生達を祝福し、彩るかのように舞散らせる中、二人の少年と一人の少女が通学路を歩いていた。

しかし、少年の一人の顔は沈んでおり、回りにブルーな雰囲気を漂わせ明らかに落ち込んでいると分かる。挙げ句深々とため息をつき、周りの景色と似つかわしくない悲痛な声を上げる。

「あぁ・・・。俺の高校生活が・・・・」

「自業自得じゃない。見てるこっちが恥ずかしかったわ。」

「ワハハハハ！総二。あれは面白かったぜ。まさかツインテール部なんて、いくら好きだからって書くかよ？」

落ち込んでいる赤毛の少年、観束総二を青いツインテールの少女、津辺愛香はあきれたと言ったようにヤレヤレと首を振り、黒髪にシャツの上に学ランを羽織った、ラフな格好をしている少年、三条貴理矢が笑った。

そう。総二は無類のツインテール好きで、今日のＨＲで志望部活を書く用紙になんと、ツインテール部と記入したのだ。しかも、ツインテール大好きとクラス中に公開する自爆というオマケ付き。これには幼なじみの愛香と貴理矢もフォローを入れられず、他人の振りをするしか無かった。

「あの時はツインテールに夢中だから仕方なかったんだよ！」

「はいはい。」

怒る総二を愛香は適当にあしらう。三条はニヤニヤしたまま、総二に話し掛ける。

「ま、ドンマイってとこだな。あ、今日お前の喫茶店寄って良いか？」

「別に良いけどコーヒーにまた大量の砂糖とミルク入れるなよ？ゴミがたくさん出るんだから。」

「ははははは！よっしゃ行こうぜ！」

「いや、返事しろよ！」

三人はそのまま喫茶店『アドレシェンツァ』に入る。この喫茶店は総二の母親である観束未春が経営しているのだが、今は当人が留守のため営業はしておらず、ガランとした店内に三人は入り、貴理矢はカウンター席に座り込むと　　総二に、ニヤニヤしながら話し掛ける。

「すみませーん。注文良いっすかー？」

「お前なぁ・・・・」

「ほっときなさいよ。いつもの事でしょ。」

愛香があっさりとスルーすると、貴理矢はつまらなさそうに口を尖らせる。

「ノリが悪いねぇ。そんなだから愛しの総二に振り向」

「わっー!!」

貴理矢が言い切るより早く、愛香の拳が貴理矢につきささり、貴理矢は椅子を巻き込んで吹っ飛んで倒れる。

「何やってんだよ愛香!?こんなに散らかしちゃって！怒られるの俺なんだからな!?」

「叔母さんはこの程度だと怒らないわよ！それに、貴理矢が変な事いうのが悪いのよ！」

二人がギャーギャーと痴話喧嘩を始める中、椅子をはね除けながら貴理矢は起き上がる。

「痛ってぇ・・・ 津辺の奴少しは手加減ってモンを知らねーのかよ・・・。」

「あの・・・ 大丈夫ですか？」

いつの間にか近くの椅子に座っていた二人組の女性の内、髪を後ろに束ねて、前髪で片目を隠している黒髪の女性が貴理矢に話し掛けてくる。

「あー、この程度、いつもの事なんで。自分は大丈夫ですんでお気になさらず。」

と、普通に答えて、一拍置いて、貴理矢は違和感に気づく。あれ？今『アドレシェンツァ』は閉まってるのになんで見知らぬ客が二人いるんだ？　もう片方の女性客に至っては新聞紙に丸い穴を開けて、総

二と愛香を観察しているような行動をしている。今時そんな奴はいないだろう。怪しさが半端ではない。
彼女が出す気配に気づいたのか、総二と愛香も二人に気づく。あまりにも不思議な珍客にどのような対応をして良いのか分からず、三人は困惑する。
「どーすんのよアレ・・・ って総二！」
「あ、ごめん。愛香のツインテール触ると落ち着くからさ。」
「全く・・・。」
総二は考え事をすると、ついつい愛香のツインテールを触ってしまうクセがあるのだ。なんでも総二曰く愛香のツインテールを触ると落ち着くそうで、愛香も愛香で満更でもなさそうで、わざわざツインテールを総二の手が届く所まで伸ばし、挙げ句、悪態は突くものの、いっさい抵抗しない。貴理矢がやろうものなら問答無用でハッ倒されるだろう。そんな二人に貴理矢は近づきながら耳打ちをする。
「んでさ、どうすんだよあの二人。どー考えてもアイツら怪しいぜ？」
何せチラチラこちらを穴の開けた新聞紙から見ているのだ。どう考えても怪しい。
「あー言うのは無視、無視するのに限るわ。変に絡まれたら面倒だもの。」
「けどなぁ・・・」
等と侃々諤々と議論をしていると、新聞紙を持っていた方の女性が急に立ち上がって、新聞紙をしまう。その瞬間総二と貴理矢は息を飲む。そこにいたのは銀髪の希に見ないモデルのような美しい女性だったからだ。しかもたわわに実った二つの双丘を強調するかのようなセクシーな服に嫌が応にも反応してしまう。一瞬愛香から殺気を感じたものの、カツカツと靴音を立てて近づく女性に三人は警戒する。そして女性と三人が対峙するかのような位置取りとなった次の瞬間、女性が総二に話し掛ける。
「初めまして。私の名前はトゥアール。向こうにいるのが助手のナフェールです。単刀直入に聞きますが、貴方、観束総二さん。」
トゥアールと名乗った女性は、総二を指差して言う。

「ツインテールはお好きですか？」
「はい！大好きです！」
「いや、おい!!」
　女性の訳の分からない質問に即答する総二にツッコミを入れる二人。嘘をつかず、真っ直ぐなところが彼の美徳ではあるが、場合が場合である。トゥアールは総二の真っ直ぐ過ぎる答えを聞くと、うんうんと頷くとポケットから赤いリストバンドのような機械の腕輪を取り出す。中央には水晶のような物が嵌め込まれ、かなり複雑な形状をしている。取り出したその装置をトゥアールは総二に向ける。
「そうですか。観束総二さんの意思はとてもよくわかりました。では何も言わず、この腕輪をつけて下さい。」
「いや待て待て待て待て!!どんな脈絡でそんな事になるのか説明しなさい！っていうか嵌めようとしているんじゃないわよー!!」
　総二の腕に謎の腕輪を嵌めよう嵌めようとしたトゥアールを愛香は腕に関節技を決めた後背負い投げの要領でトゥアールをぶん投げて地面に叩きつける。
「げばふっ!?」
「おいィィィィィィ!?何やってんだお前!?いくら怪しいからって見ず知らずの人をぶん投げるなよ!?」
「知らないわよ！変な事をしようとしたコイツが悪いのよ！後、この無駄な脂肪の塊を見せつけてくる服がイラッとするのよ！」
「思いっきり私怨じゃないか!?」
　突然の蛮行に貴理矢は思わず声を上げる。下手すりゃ骨折ものの一撃に思わず総二も顔が青ざめる。
　床に叩きつけられたトゥアールはピクピクと痙攣しながら溢すように呟く。
「べ、別に怪しいものじゃないのに・・・。」
「どこをどう見たって怪しいわよ！」
「それに関しちゃ同感だけどな。」
　愛香と貴理矢がトゥアールを睨むと、トゥアールは困惑した顔になった後、ヨヨヨと声を上げ、急にさめざめと泣き始める。

「今更、他に適合者は探せないんです・・・。でも、早くしないとこの世界からツインテールが消滅してしまうんですよ!!」
「な、何だって!?」
「どわっ!?」
「ちょっ、総二!?」
　トゥアールが話した〝ツインテールが消える〟という言葉に敏感に反応した総二は貴理矢と愛香をはね除けてトゥアールに詰め寄る。
「この世界からツインテールが消えるって、どういうことだよ!?今すぐ説明してくれ！」
「はーい。ではこのブレスレットを差し上げますね。」
　トゥアールが満面の笑みを浮かべた次の瞬間総二の右腕にガチャリ、と腕輪が嵌め込まれる。
「あ。」
「あああああああ!?」
　総二が間の抜けた声を上げると同時に愛香の凄まじい延髄蹴りがトゥアールに炸裂し、そしてそのまま愛香は総二の腕に着いたブレスレットを外そうとする。
「え!?今人体から鳴っちゃいけない音が聞こえたんだけど!?あの人大丈夫なのか!?」
「何これ！外す部分がないじゃない！」
「いだだだだだだ!!愛香やめてくれそれ以上は俺の腕がもげるゥゥゥゥゥ!!」
　愛香が必死に外そうとするがびくともしない。しかもそのままブレスレットに繋ぎ止めみたいな物はなく、ガッチリと総二の腕にジャストフィットしているせいで、愛香が無理矢理外そうとしても全然外れないどころか総二にダメージがいっている。
「きっとアイツこのブレスレットを押し売りする気なのよ！断ったら店の表で待機している顔面ピアスだらけのヤバイチンピラがスタンバイしてるのよ！」
「ねーよ！前半はともかく後半はねーよ！ってあああああああ引っ張るのはやめてくれぇぇぇぇぇ!?」

恐らくこれ以上やれば腕輪を外すより先に総二の腕がイカれてしまう。貴理矢は伸びているトゥアールの頬をペチペチと叩いて起こす。
「おーい。起きてアレの外し方教えてくれ。」
「うごごご・・・ 残念ですけど、アレを外す訳にはいきません。あれは総二さんではないと意味が無いのです・・・。」
「は?そいつはどういう」
意味深な発言をするトゥアールを問い詰めようと貴理矢が動くより先にトゥアールは後ろでいつの間にかスタンバイしていたナフェールに合図を飛ばす。
「説明するより見て頂きましょう・・・。ナフェール!」
「了解です・・・。」
ナフェールが謎のスイッチを押した瞬間辺りが白い光に包まれる。
「うおっ!?」
「きゃっ!?何!?」
「いだだだだだだ!?」

そして白い光が消え、目が慣れてくると、そこは野外だった。
「・・・ は?」

野外だ。太陽の光が降り注ぎ、雲一つない青空が広がり、青臭い草の匂いが鼻をつき、光を反射する熱せられたアスファルトの上に五人は立っていた。
先程まで確かに『アドレシェンツァ』にいたハズなのに。
「あ、あれ!ま、マクシーム宙果じゃないか!?」
光のどさくさに紛れてなんとか脱出した総二が驚きの声を上げる。確かに総二が指差す先には大型ショッピングモール、『マクシーム宙果』があった。自分達がいた『アドレシェンツァ』からはかなり離れている。しかも時計を見れば『アドレシェンツァ』にいた時から数分も立っていない。なのに自分達は今、『マクシーム宙果』の駐車場にい

る。まるで瞬間移動でもしたかのような不思議な出来事に三人が困惑していると、トゥアールが『マクシーム宙果』の方を向きながら呟く。
「手遅れでしたか。予測より早かったですね・・・。」
「は?・そりゃどーいう・・・。」
　貴理矢がトゥアールに尋ねようとしたその時、焦げ臭い匂いが辺りに立ち込めているのに気づく。そして一拍置いて、轟音と共に貴理矢達の近くを自動車がものすごい勢いでぶっ飛んで行き、一瞬でスクラップとなる。
「・・・　え?」
「な、何よこれ!?」
「し、静かにしてください。今は認識撹乱で誤魔化していますが、大きい声を出すと奴等に気づかれてしまいます。」
「にんしき、かくらん?・何の事よ!?・というか何がどーなってんのか説明しもがっ!?」
　説明するナフェールに詰め寄ろうとする愛香の口をトゥアールが手で塞ぎ、モゴモゴと暴れる愛香に、口元に指を立てて、静かに、のジェスチャーをする。すると愛香も納得いかないと目で抗議するものの渋々と了承して黙る。
「すみませんが、奴等に気づかれる訳にはいかないので・・・・。アレが、奴等にです。」
「なんじゃありゃ・・・　!?」
　トゥアールが指差す先に爆煙を引き裂いて、謎の怪人が現れる。突然現れた怪人に三人は驚く。緑色の肌にトカゲのような風貌と尻尾。筋肉はシュッと引き締まっており、体を覆う鎧も相まって凄まじい威圧感を醸し出している。そのトカゲの怪人は後ろにいる大量の手下とおぼしき黒い戦闘員に向かって、迫力のある声で叫ぶ。
「ワハハハハ!!・この世界の全てのツインテールを我が手中にする時が来たのだ!!・さぁ、者共!・ツインテールを我が元に集めるのだ!!」
　その言葉を聞いた瞬間総二はずっこける。迫力のある声で何を言っているのだあのトカゲ怪人は。この惨状に似つかわしくない余

りにも場違いな発言に総二が困惑していると、愛香と貴理矢がジト目で総二を見る。
「総二、あんたいつの間にあの着ぐるみ着てたの？今からでも遅くはないからさっさと撤収して、その思いの丈は海にでも吐き捨てて来たら？」
「なんで俺が着ぐるみを着て叫んでるみたいになってんだよ!?あそこまでひどくはないだろ!?」
「お前いくらツインテールが好きだからってお前・・・。」
「いや、違うからな!?俺じゃないからな!?」
　総二が弁解していると、トカゲ怪人はモケモケ鳴く戦闘員にやれ、ぬいぐるみを持ったツインテールの幼女を持ってこいと叫び、いないと分かればこの文明遅れてると嘆いた後持ってなければ用意するのが男の甲斐性だのとのたまい、段々変態度をエスカレートさせていく。その状況を見ながら貴理矢は呆れた様に呟く。
「しっかしなんて言うかこう、緊張感が持てない相手だな・・・。」
「油断しないで下さい。アレでも数々の文明のせかいを滅ぼしてきた悪魔です。」
「マジか。」
　ナフェールが貴理矢に注意するが、悪い冗談のような気がしてならない。等と訳の分からない状況に立ち往生していると。
「何故このような事をするのですか！今すぐこの行為を止めて他の方々を解放しなさい！」
　と鋭い一声が飛ぶ。見ればそこには一人の金髪の小さな少女が自分の倍近い身長のトカゲ怪人に向かって叫んでいた。余りにも無謀な行為に全員の目が自然と向かう。
「あれ生徒会長じゃない！」
「何だって!?」
　愛香が言うとおり、そこにいたのは総二が愛香の次に認めた素晴らしいツインテールを持つ少女、神堂慧理那生徒会長だ。顔も美人の部に入る程の愛らしさで、貴理矢も総二が生徒会長に夢中になる気持ちが分からないでもない。

しかしトカゲ怪人はさっきのが嘘で無ければ車を易々と吹っ飛ばす力を持つ。そいつに真っ正直から喧嘩を売るのはどう考えても無謀である。しかしトカゲ怪人は何やら感心した様子で、生徒会長に可愛らしいウサギのぬいぐるみを持たせたかと思うと、あっという間に撮影用とおぼしきセットを作り、撮影を始める。機材も中々で、割りと本格的なもので細かい指示が出される。
「えっーと、色々察するにあの・・・ トカゲを倒すために総二にそのブレスレットをつけたのか？」
なんかこのままでは雰囲気が壊れてしまうような気がしたので貴理矢は強引に話題を変えていく。トゥアールはその質問に真剣な表情で答える。
「はい。その通りです。信じられないかもしれませんが。私は総二様のツインテールを愛する心の強さを見込んで、そのテイル・ギアを託したのです。」
「テイル・・・ ギア？」
総二は自分の右腕に着いたブレスレット、テイル・ギアを眺める。
「でも、どうやって戦うんだ」
総二が言い終わるより先にトカゲ怪人がいる向こうで動きがあった。トカゲ怪人が繰り出した謎の機械の輪が生徒会長を通過した瞬間、まるで花が散るように生徒会長のツインテールがほどける。そして意識を失って、倒れる。
「・・・ ああやって、奴等は罪のないツインテールを搾取していっているんです。」
トゥアールが顔を下に向けたまま呟く。その表情は分からないが、悔しがっている事だけは誰にでも分かった。その瞬間、総二の中でブツン、と何が切れた。目の前で自分が心から素晴らしいと思える物が踏みにじられた気がしたからだ。激怒した総二の雰囲気に、幼なじみである愛香でさえ、どう声をかけて良いか分からず萎縮する。
「トゥアール、教えてくれ奴等をどうやって倒すんだ？」
「分かりました！まずはですね、私のブラのホックを」
「いや、こんな真面目な瞬間に何やってんのよ!!」

「ぎゃふん!!」
突然脱ごうとしたトゥアールに愛香のキレイなブレーンバスターが炸裂する。アスファルトに思い切り体を叩きつけられてトゥアールが悲鳴を上げるなか、ナフェールがおずおずと手を上げ、総二に言う。
「あの、そのテイル・ギアを使って変身するんです。」
「変身?」
「はい。そうすれば戦えます…。」
総二は自分の右腕に着けられたテイル・ギアを見つめる。テイル・ギアは何も言わず、ただキラリと光を反射する。
「でも、良いんですか… ?変身すれば、もう、今までの日常は遅れませんよ?」
地面に叩きつけられたまま、這う這うの体のトゥアールが総二に話し掛ける。しかし、その瞳は真剣そのものだ。総二はテイル・ギアから愛香と、貴理矢の二人に見ても目を移し、そしてトゥアールの方を向いて、言う。
「構わない!俺は戦う!」
「総二!」
「トゥアールとやらはああ言ってるけど良いのかよ?」
総二の宣言に愛香は難色を示し、貴理矢が問う。総二は貴理矢に向かって言う。
「俺は、俺の大切なものを守るために戦いたいんだ。」
「… へっ。昔っからそう言う奴だよな。」
貴理矢はヤレヤレと肩をすくめ、道を空ける。
「行ってこいよ。ただ、危なくなったら迷わず引けよ。」
「あぁ。」
総二は貴理矢が空けた道を行く。貴理矢はフッと笑ってそれを見送る。
「総二様!戦う気持ちを込めて、テイル・オンと叫んで下さい!」
「え?えっーと、テイル・オン!!」
トゥアールの指示通り、総二はテイル・ギアを掲げて叫ぶ。そして

次の瞬間、テイル・ギアが展開し、赤い炎のような光が辺り一面に広がり、あまりの眩しさに全員は目を背ける。そして、赤い光は敵に向かって飛んで行く。
「どうやら、成功したみたいですね。」
「ええ！新しい戦士の誕生ですね！」
　ナフェールとトゥアールが喜ぶ中、貴理矢と愛香は小首を傾げる。
「あれ、今。」
「ちっちゃい子供が通ったような？」
　その赤い光が、晴れ、よく目を凝らすとそこには、小さな赤い髪でツインテールの女の子がいた。そう、さっきまで男だった総二が、戦闘服とおぼしき物を着ている小さな小学低学年位のツインテールの幼女となっていたのだ。
「「えええええええええ!!?」」
　貴理矢と愛香は目を丸くする。流石に幼なじみが幼女になれば、誰でもビックリするだろう。件の総二と言えば、そのまま敵に突っ込み、まるで紙のように戦闘員とおぼしき敵を吹き飛ばしていく。そして、アスファルトを砕きながらブレーキをかける。性能面は確かに敵と戦えそうではある。問題は外見だ。総二も体の違和感に気づいた様で、車のガラスを見て、困惑している。
「あれ、どうなってんのよ!?なんで総二が女の子になってんのよ!?」
「いや、あーするとですね、敵の注意が総二様側に食い付くんですよはははは。」
「いや、はははじゃねーよ！」
　愛香と貴理矢がトゥアールに抗議している内にも総二にトカゲ怪人が詰め寄り、可愛らしい熊のぬいぐるみを持って何やら言っている。とてもヤバい絵面である。貴理矢は頭をかいて、わたわたしているナフェールに尋ねる。
「おい！何か、あのテイル・ギアとかみたいなの無いのか!?あのままじゃ色々ヤベーぞ！」
「え、えっとですね、これなら・・・。」
　ナフェールは貴理矢に黄緑色のドライバーと黄色のカセットのよ

うな物を取り出す。
「テイル・ギアで戦う戦士のサポート用に開発したゲーマドライバーと変身に必要なツールのガシャットです。」
「これを使えば変身出来るんだな!?」
「貴理矢!」
　ドライバーとガシャットを受け取る貴理矢に愛香が声をかける。貴理矢は愛香の方を振り向いて言う。
「心配すんな。親友を見捨てる訳にはいかねぇ。ヤバかったら、俺も逃げる。」
　貴理矢は愛香に微笑みかけると、そのままゲーマドライバーを腰にあてがう。すると、ゲーマドライバーからベルトが伸びて、固定される。
「ガシャットを起動して、ドライバーにガシャットを差し込んで下さい!」
「了解。」
　貴理矢はガシャットのスイッチを押す。
《爆走バイク!》
「ノリノリで行くぜ~。一速。変身!」
《ガシャット!》
　貴理矢はガシャットをゲーマドライバーに差し込む。すると、パネルが貴理矢の前に現れて、回り始める。そして、そのパネルに貴理矢は回し蹴りを叩き込む。
「行くぜ!!」
《レッツゲーム!ムッチャゲーム!メッチャゲーム!ワッチュアネーム!?》
　蹴ったパネルが貴理矢を真正面から包む。そして、次の瞬間、そこには、頭部にピンク色のスパイク、バイクのハンドル、青い瞳。そして、胸部にはゲージとまるでゲームのコントローラーのボタンのようなデザインの装甲。そして両手にはバイクの前輪と後輪に銃口を着けたような武器を持つー、
《アイム　ア　仮面ライダー》

３頭身のゆるキャラがそこにいた。

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　Ｎｅｘｔ　Ｇａｍｅ．．．．

俺、初戦闘です。／Ｆｉｒｓｔ　ｆｉｇｈｔは突然に

総二は困惑していた。何せ謎の怪物からツインテールを守ろうとトゥアールから変身アイテムの使い方を教えて貰い、変身したまではよかったのだが、何故か自分は幼女になっていて、その上敵は思った以上に変態だった。今も

「そのツインテールでワシの頬をペチッとしてくれ！」

「このウサちゃんのぬいぐるみを抱いてくれ！」

「なんと凄まじき幼気とツインテールよぉぉぉぉ!!」

もはや変態を通り越してホラーである。そして、他人から見れば、自分もこんな感じだったのではと自己嫌悪に陥る。自己嫌悪と恐怖で顔は青ざめて、縮こまり、トカゲ怪人が鼻息荒くジリジリと距離を詰めてくる。あまりの出来事の連続にパニックになった総二は思わず目を瞑る。

「極上のツインテール、貰いうけるぞ!!」

「ひっ、」

トカゲ怪人の右腕が総二に遅い掛かろうとした瞬間、横から謎の人物が介入し、持っている武器で思い切りトカゲ怪人を殴り飛ばした。

「ぬおっ!?」

「はーい、そこまでー。」

総二が目を開けると、そこには3頭身のゆるキャラがいた。どうやらコイツが総二を救ってくれたらしい。３頭身は総二の方を振り向いて手を指し延ばす。

「おいおい。大切なものを守るために戦うんじゃなかったのか？」

「・・・　！その声、貴理矢か!?」

「ご名答。よっと。」

貴理矢は掴んだ総二の腕を引っ張って立たせる。そしてポンポンと肩を叩いて、総二に言う。

「お前はアイツらとは違う。自分達の欲のために誰かを傷つけるような奴じゃない。」

『そーよ！総二はツインテールバカだけど、そんな事はしないわ！』

「皆・・・・。」
　貴理矢と通信機越しの愛香の激励に、総二は思わずウルッと涙腺が弛んで涙が出そうになるが、慌てて目を擦って、頬を叩いて気を持ち直す。
「ぬぬぅ、極上のツインテールの幼女が来たかと思えば、今度は訳の分からぬ者・・・ ワシはエレメリアンの切り込み隊長リザトギルディ!! 貴様ら名を名乗れぃ!」
　トカゲ怪人・・・ いや、リザトギルディは瓦礫をはね除けると、槍を二人に突き出し堂々と名乗りを上げ、問う。
「おうおう。ご丁寧に。んじゃ、総二、名乗ってやれよ。」
「えっ!?え、えっーと、テイルレッド!テイルレッドだ!」
「うしっ、俺は仮面ライダーレーザーだ。ヨロシク。」
　突然の貴理矢の無茶振りに総二は焦りながらも名乗りを返す。その様子を見ながら、貴理矢も名乗りを上げる。
「成る程!テイルレッド・・・ 覚えたぞ!」
「いや、俺は!?」
「ええい、幼女どころか、ましてツインテールでもない貴様に用等ないわ!行け、アルティロイド共!」
　自分の事を無視した事に関して抗議するレーザーにアルティロイドをけしかけ、リザトギルディはテイルレッドに向かう。
「ちっ、しゃあねぇ。俺があの雑魚共を受け持つから、お前はトカゲ野郎をやれ!」
「あぁ!」
　貴理矢、レーザーの指示に、総二、テイルレッドは従ってそれぞれの敵に立ち向かう。
　レーザーは両腕のフロントアームドユニットと、リアアームユニットを構えて、アルティロイドに立ち向かう。両アームドユニットから放たれる電磁弾が次々とアルティロイドを撃ち倒す。さらに、見掛けに反した身軽な動きで接近戦を仕掛けるアルティロイド達に的確にアームドユニットのタイヤの部分でアルティロイド達を削り、そして蹴りを叩き込む。

テイルレッドも、剣を召喚し、炎を纏ったその剣でリザトギルディを切り着ける。
「おら、望み通りペチッとしてやるぜ！」
「うおっ!?」
剣はかわすものの振り回された炎がリザトギルディの肌を焼く。堪らず後退するリザトギルディをテイルレッドは苛烈に炎の剣で攻め立てる。剣を避け、時には槍で受け止めながらリザトギルディは何処か嬉しそうに言う。
「フフっ、幼女に追いかけられるというのも中々、乙なものよな!!」
「変な事言うなー!!」
どうにもペースを崩される中、レーザーはアルティロイド達を連続して踏みつけた後、回転しながら弾丸を撒き散らして、アルティロイド達を一掃する。
「うっし。一段落ついたかな！」
『貴理矢さん。レベルアップして、テイルレッドの支援に向かって下さい。』
「レベルアップ？」
『ゲーマドライバーのレバーを開いて下さい。そうすればレベル1からレベル2に変身出来ます。』
「なーるほどね。んじゃっ、二速！」
レーザーが言われた通りゲーマドライバーのレバーを開くと、電子音声と共にレーザーは飛び上がる。
『爆走！独走！激走！暴走！爆走バイーク!!』
次の瞬間、レベル1のアーマーがパージされて行き、アームドユニットが前後に接続される。そしてレーザーレベル2は地面に着地する。黄色と黒のコントラストが目を引く一台のバイクがそこにいた。
「・・・・は？」
『仮面ライダーレーザーバイクゲーマーレベル2です。』
「いやいやいやいやいやいやいや!!おかしい!!」
『完全にバイクになってるじゃない!?』

バイクのライトに当たる部分の顔が左右に振れる。レベルアップと言うから、このゆるキャラ状態から脱却出来るかと思いきや今度はバイクになったのだ。と言うか今自分の体はどうなっているのか貴理矢は心配で仕方ない。愛香と貴理矢の抗議に、ナフェールは消え入りそうな弱々しい声で応える。
『だ、だって最初に言ったじゃないですか。サポート用だって。』
「いやさ、確かにサポート用だとは聞いたけど、普通バイクなんて連想するかよ!?」
『あー、やっぱり私が言う通り、幼女デザインにして、姉妹系にすれば良かったんですよ。』
「それはそれでお断りだけどな！ってヤベ。」
バイクとなって文字通り手も足も出ないレーザーにアルティロイド達がこれ幸いと襲い掛かって来た。何とか反撃に転じようとするが、ガタガタと左右に揺れるだけで、どうしようもない。
「だぁぁぁぁ!?タンマタンマ、ヤバいヤバいって、うわあああああこうなりゃヤケだ！」
レーザーが覚悟を決めて、一直線に走り出すとイメージした瞬間、エンジンが始動し、車輪が回ってマフラーから火が噴き出し、一気に加速する。そして、加速したレーザーの体当たりが、アルティロイド達を撥ね飛ばし、一気にアルティロイド達の間を走り抜ける。目を開けると回りにはレーザーの体当たりによって撥ね飛ばされたアルティロイド達が粒子となって消えていき、レーザーは目をパチクリさせる。
「お、おおおお？」
『貴理矢様ナイスです！そのまま総二様、テイルレッドの支援に！』
「あ、ああ！成る程。こういう感じなのね。」
取り敢えずこの状態での戦い方の感覚を掴んだレーザーは車輪を走らせ、テイルレッドの下へと疾走する。そして、そのままテイルレッドと相対している、リザトギルディに体当たりを仕掛ける。
「ぬおっ!?今度は何だ!?」
「ば、バイク？」

しかし、流石は切り込み隊長を自称するだけあってか、ギリギリの所でリザトギルディはレーザーに気づき、バックステップで後ろに飛び下がってレーザーの体当たりを回避する。そのままレーザーはポカンとしているテイルレッドの横にドリフトしながら停車する。
「よっ！テイルレッド！」
「えっ!?レーザー!?っていうかどうなってんだそれ!?」
「正直俺が知りたいが説明は後だ！乗れ！」
「お、おう？でもバイクに俺乗った事無いぞ？」
「俺がサポートしてやるよ！」
レーザーに促されてテイルレッドはおっかなビックリレーザーに乗る。すると、テイルレッドに合わせてシートが調整される。
「あ、意外と中々の座り心地・・・。」
「ま、俺も女の子に乗ってもらえて役得だけどな。」
「何か言ったか？」
「別に？それより、アイツが防御するより早く、奴の懐に入り込んで一撃をかますぞ。俺のハンドルを左手でしっかり握ってその剣を奴にぶちこむ事だけ考えとけ。それ以外は全部俺がやる。」
「おう！任せた！」
レーザーのアドバイスにテイルレッドは笑みを浮かべて返し、テイルレッドの剣から炎がさらに噴き出す。それと同時にレーザーのエンジン音も徐々に早くなってくる。
「ぐぬぬぬ・・・ なんとも無粋で珍妙な奴め。我と幼女の戯れを邪魔するとは！ならば、これでも喰らうがいい！」
リザトギルディは気合いと共に背中から背鰭状のミサイルを発射する。放たれたミサイルは煙の尾を引いてレーザーとテイルレッドに襲いかかる。迫りくるミサイルを見ながらレーザーが叫ぶ。
「行くぜ！テイルレッド！勝利のウイニングランを決めるのは！」
「俺達だ！」
レーザーの合図にテイルレッドは答え、そして、レーザーは爆音を上げ、疾走する。そのままテイルレッドを乗せたレーザーは次々と縦横無尽に襲いかかるミサイルを華麗なドリフトターンや、ジャンプ

で次々とかわしていく。
　テイルレッドも剣でミサイルを切り捨て、防御をする。そしてレーザーは最後のミサイルを廃車同然の車をジャンプ台にして跳躍することで、そのミサイルをかわす。そして、背後でミサイルが炸裂したことで、爆発した車の爆風で、さらに加速する。
「何!?全て避けきるだとぉ!?だが、素晴らしい!素晴らしいツインテールの靡かせ具合よ!バイクの方、見直したぞ!ところで、記念写真を撮りたいのでテイルレッドよ!このぬいぐるみを持ってこてんとその頭をワシの胸に傾けて」
「いい加減にしろこの変態!オーラピラー!」
　剣の先から赤い光の塊が発射され、その赤い光はリザドギルディに直撃すると赤い光の柱となってリザドギルディを拘束する。
「ぬおっ!?う、動けぬ・・・・ !?」
「ナイステイルレッド!!今だ!!」
　光の柱に拘束され、動けないリザドギルディにテイルレッドを乗せたレーザーが一瞬で距離を詰める。
「ツインテールは愛でてこそ輝くもんだって事も知りやがれッ!グランドブレイザー!!」
　すれ違い様に一閃。テイルレッドの啖呵と共に繰り出された炎の刃がリザドギルディを切り裂く。
「よっと・・・・。」
　レーザーがドリフトしながらブレーキを入れて停車する。リザドギルディは信じられぬと言った表情だったが思い直したように笑みを浮かべる。
「ふ・・・ ふはははは素晴らしい・・・・ 究極のツインテールの前に果てる・・・・。何の悔いがあろうか・・・ 男子本懐の極みッ!今日という日は未来永劫忘れないであろう。・・・ そうだそこのバイク記念写真を頼む。こう俺の肩にこてんと頭を預けてぬいぐるみを・・・・」
「おっおい?ちょっ」
　リザドギルディが何やら妙な寒気がするものを幻視していると感じたテイルレッドが何か言う前にリザドギルディが閃光に包まれる。

「ありがとう・・・ さらばだ・・・ !!」
「勝手に妙な幻想を見て消えるなぁぁぁぁぁ!!!」
爆発と共にテイルレッドの悲痛な叫びが辺り一面に響いた。

「くっそ最後の最後で妙な鳥肌が・・・・」
『そーじ!やったわね!』
『あとはあのリングを破壊すれば奪われたツインテールが元に戻るハズです!』
トゥアールからの通信通り、テイルレッドはツインテール属性を奪ったリングを切り裂く。するとリングから淡い光があちこちに飛んでいき、ツインテール属性を奪われた人々にツインテールが戻っていく。
「ふぅ・・・・。なんか無我夢中だったけど・・・ 俺、この子達のツインテールを助けたんだよな・・・・ 良かったぁー。」
「これにて一件落着だな。レッド。」
レベル1に戻ったレーザーがレッドに話しかける。ふたりが見つめる先にはツインテールが戻り、無事を喜ぶ人々がいた。テイルレッドはチラッとレーザーを見てそれから照れ臭そうに言う。
「あの・・・ さ。ありがとな。助けて貰って。」
「いーのいーの。ダチなんだから当たり前だろ?」
二人がそうやっていると目の前に一人の少女がふらっと現れる。
「あの。助けて頂いてありがとうございます。」
美しい金髪のツインテール。神堂会長だった。正体がバレる訳にはいかないので二人は慌てて誤魔化そうとする。
「俺・・・ いや、私はたまたま通りすがっただけで・・・」
「いえ・・・ 途中で目が覚ましてましたの。」
(マジか・・・ !?)
(やべぇずっと意識ないもんだと・・・。)
二人が冷や汗を流す中、会長は二人に話しかけ続ける。
「まだ小さいのに勇敢で・・・ 強くて・・・ 私感激しましたわ。こちらの

トゲトゲさんも・・・ ふっくらとしていらっしゃるのにとてもご立派で・・・。バイクになったのはビックリしましたけど・・・。」
「レーザーです。」
レーザーが訂正を入れる。会長はそこで区切った後、おずおずと二人に問いかけた。
「あのっ・・・ また・・・ お会いできますか?」
そう問われ、テイルレッドとレーザーが互いを見合った後、テイルレッドが答えた。
「貴女が。ツインテールを愛する限り。」
そうテイルレッドに言われると神堂会長はポカンとした顔つきになる。すると向こうからメイド達がお嬢様ー!と叫びながらこちらに近づいてくる。
「やっべ!撤収だ撤収!」
「お、おう!」
レーザーとテイルレッドはスタコラとその場を後にした。メイド達が駆けつけ会長に口々に大丈夫ですか?と安否の言葉をかける中、会長は遠くなっていく二人の背中を見ながらクスリと笑った。
(きっと次の戦いに向かったのですね。)
二人が見えなくなるまで会長は二人の背中を見つめていた。

《フッ・・・ 中々面白いショーだった。》
彼らが戦っていた駐車場を近くのショッピングモールの屋上から一人の人物が覗いていた。その声は加工音声で、老若男女、どのような人物なのか推測できない。
全身を紫色を基調とした装甲に身を包み、黒いはねあがった髪のような意匠のメットが目を引く。
《エレメリアン。テイルレッド。そして私と同じゲーマドライバー所持者・・・。》
赤い瞳が妖しく光り、眼下に広がる風景を見つめる。そしてその人物は笑うように呟いた。

《さぁ。楽しいゲームのスタートだ……。》

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　Ｎｅｘｔ　Ｇａｍｅ……

俺、生活が一変します。／Ｃｈａｎｇｅする日常

何処とも知れぬ不思議な、そして人類が絶対に到達することはかなわない別次元の空間にあるエレメリアンの地球侵攻への前線基地。その基地内の会議室は今大騒ぎになっていた。

「リザドギルディが倒されただと!?しかも人間に!?」

そう。事前調査でこの世界の文明レベルは自分達に遠く及ばないと結論付けられていたにも関わらず出兵したリザドギルディが倒されたのだ。

「馬鹿な有り得ぬ!!」

「油断していたでは済まされぬぞ!!」

「この世界は我らの理想の狩場では無かったのか!?」

「どういう事だ!?」

様々な姿形の怪人達が騒ぎ立てる中、一際大きな椅子に座っている怪人がしばし議論を聞いた後、鋭い一声を放つ。

「静まれいっ！」

まさに鶴の一声。あれだけ騒いでいた怪人達がすぐさま静かになり、全員がその怪人の方を向く。その怪人は雰囲気、そして佇まいからして他の怪人と一線を画していた。

体のあちこちにある傷や、その鍛え上げられた肉体が歴然の猛者であることを雄弁に物語っていた。

「これを見よ。」

その怪人ほ手前のパネルを操作して会議室のスクリーンに映像を浮かべる。その映像に映っていたには華麗に舞い、アルティロイド達を凪ぎ払うテイルレッドの姿であった。

「こ、この幼子は・・・」

会議室がざわつく中、怪人は続ける。

「嬉しい誤算とはこの事か。やはり予期せぬ難敵に立ちはだかられてこそ、武人の血が騒ぐというものよ!!」

ー次の日。陽月学園で総二達は緊急集会という訳で体育館に全校生徒と共に体育館に集められていた。そして目の前の壇上で神堂会長が演説をしている。
「皆さん。知っての通り昨日謎の怪人達が暴れまわり、町は未曾有の危機に直面しました。実はこのわたくしも現場に居合わせ、そして狙われた一人です。」
神堂会長が狙われたと聞いた瞬間何人かの生徒から声が上がる。
「会長を狙うなんて!!」
「なんて奴らだ!!」
「こうなりゃカチコミだカチコミ!!」
「腹にダイナマイトをくくりつけてカチコミだ!」
「・・・ おいおいどこのヤーさんだよ。」
あまりの熱狂具合に貴理矢は苦笑いを浮かべる。ここまで人を惹き付ける神堂会長もスゴイのだが。
「しかし、今わたくしは無事ここにいる・・・ 正義の戦士に助けていただいたのです。」
後ろのスクリーンに一人の幼女と三頭身のゆるキャラが映し出される。総二に嫌な予感が走る。
「あの場に颯爽と現れた・・・ 私はあの少女とこのバイクさんに心奪われましたわ!! 」
「レーザーです。」
貴理矢が小声でツッコミを入れるが神堂会長が放った一言に呼応するように周りから歓声が上がる。
「その言葉を待っていたぜ!!」
「良かった・・・ 胸を張ってちっちゃい子にハァハァ言うのに正直引目を感じてたんだ。」
「会長がそう言うんだから何の憂いもない！」
「いや駄目だろ憂いを持って、そしてハァハァするんだ！」
「ちっちゃい会長がちっちゃい正義の味方に憧れる・・・ これが摂理か！」
全員が歓声を上げる中、総二は悶絶する。そりゃ自分の女装が晒さ

れて持ち上げられれば当然ではあるが。
「あれ？レーザーは？レーザーについては？」
　そして貴理矢は貴理矢で全く自分の話が持ち上げられないことに困惑する。
「我々神堂家は全力であの方を支援すると決定しました！皆さんもどうかわたくしと共にあの新世代の救世主を応援していきましょう！」
　神堂会長がそう宣言するとまた一際大歓声が上がる。その大歓声の中総二は叫んだ。
「いやそんなノリなら昨日の事も流せよオオオオオオ!!」

　集会の後、テイルレッドの話で盛り上がる教室の中で総二と貴理矢は机に突っ伏していた。やれやれと嘆息した愛香が言う。
「そーじはともかくなんで貴理矢まで突っ伏してんのよ？」
「・・・・ レーザーの事クラスに聞いたらテイルレッドの付属品扱いだった・・・」
「あ・・・ そう。」
　そう言うと貴理矢はまた力無く机に突っ伏す。総二は机に突っ伏していたものの昨日の自分を思い出す。勝手に囃し立てられてスクリーンにデカデカと映し出され、胃が痛いものの昨日の自分の姿は。
「いや・・・ 我ながら見事なツインテールだったな・・・。」
「ちょっとそーじ！」
「な・・・ 何愛香？」
　少し夢心地でにやけていた総二を愛香の一声が現実に引っ張り込む。
「何？じゃないわよ。また聞くんでしょトゥアールとナフェールからテイルギアとゲーマドライバーについて！」
「そ、そうだな。昨日の説明じゃ分かり辛かったし。」
「あたしも一緒に聞くからね。」
「お、おう・・・・。」

遡ること昨日の戦闘終了後。総二の母にバレないようにトゥアールとナフェールの二人を何とか総二の部屋まで辿り着かせた三人はようやく一息をつく。
「ふぅー、何とかバレずに済んだ・・・。」
「まさかおばさんの気を引くために裏切られた三下の演技をするハメになるとはな・・・。」
「貴理矢がいなかったら危なかったかも・・・。」
三人は一息ついた後、居心地悪そうなナフェールとしきりにキョロキョロしているトゥアールに話しかける。
「取り敢えず、あの変態達と俺が貰った力について教えて貰うからな。」
「あぁ。はい分かりました。スミマセン。何分男の子の部屋は初めてなんで。」
トゥアールがニヤニヤしながら言うとピキリと愛香に青筋が浮かぶ。そんな事はいざ知らずトゥアールは続ける。
「まずは順を追ってテイルギアとゲーマドライバーから・・・ えいっ。」
「こっちがゲーマドライバーとガシャットです。」
トゥアールとナフェールはそう言うと腕についている装置から電子パネルを空中に浮かび上がらせる。
「・・・ モ、モニターが出て来た。」
「いちいちオーバーテクノロジーでワクワクしちゃうじゃねぇか・・・」
「？」
総二と貴理矢がオーバーテクノロジーに男の子の部分をくすぐられている中、トゥアールは自慢気に語る。
「このモニターを見て頂ければ大体分かります。」
「へぇ、どれどれ。」
モニターに映っている文字は日本語で三人にも読めた。各部の機能にフォトンサークルだのエクセリオンフィンガーだのスピリティカブーツだの名前が付いており、その下にかなりのオーバースペックな事が書いてある。

レーザーも同様だが、テイルレッドと違いレベル1，2があるので情報量も膨大である。ＬＺ―１　ＢＩＫヘッドだのコズモビッグシューズ、コモンアンブレイカーだの様々な事が書かれている。
「・・・　ん？」
貴理矢はスペック欄の下の方の部分に写真は無いが黒い？マークの下にレベル３という項目を見つける。
「このレベル３ってのは？」
「あっ、それはまだ戦闘データが揃っていないのでまだ完成していないんです。これから戦闘経験を積んでいけばそれを元に開発が進んでいく予定です・・・。」
「ふーん・・・。」
貴理矢がまじまじと見つめていると向こうから愛香が何やら言っているのが聞こえる。
「どれもこれもアホすぎるけどこのフォースリヴォンって何よ！なんでウに点々つけてんのよ！」
「何言ってるんですか！年頃の男の子はウに点々が大好物なんですよ！ま、所詮男を知らないメンヘラ女子の愛香さんには理解出来ないでしょうけど!!」
何かこだわりがあったのか。愛香の指摘に真っ向からトゥアールは反論する。その反論に愛香は顔を真っ赤にしながら返す。
「な、ななな何よ！じゃ・・・　じゃああんたは沢山経験があるの!?」
「失礼な。愛香さんみたいなビッチと一緒にしないで下さい。処女に決まってるじゃないですか。」
次の瞬間愛香のそれは綺麗な一本背負いがトゥアールに炸裂した。
「あのー、トゥアール？このパンツの部分のエクセリオンショウツって何？空欄なんだが・・・。」
「ああ・・・　そこは，・・・」
話題を変えようと総二が気になった部分を尋ねるとトゥアールは打ち付けられた部分をさすりながら答える。
「戦闘が長引いてトイレに行きたくなっても素早く吸収し、分子分解して大気に拡散してくれる機能が」

（聞くんじゃ無かった。）
まさかの機能に総二は頭を抱えたくなるが、それよりも一番聞きたいと思った事を思い出す。
「あ、テイルギアの仕組みも良いけど俺の身体!!なんで女の子の身体になるのか教えてくれよ!!」
「あ、それ自分も聞きたい。」
「女の身体の事を教えて!?」
総二の至極真っ当な疑問に貴理矢も同調するが、トゥアールは何故か頬を赤らめ服を脱ごうとする。しかも笑顔で。
「ふふふそうですね。覚悟はしてました・・・ 戦いで昂った男性の家にノコノコついていく時点で。私の心も何処かできっとこんな」
「早よ言え。おっぱいごと削りカスにするわよ。」
修羅のごとき顔の愛香にトゥアールは警戒して距離を取りながら説明する。
「て、テイルギアをまとうとロリっ子に・・・ なるのは・・・ 私の趣味ですよ!!悪いですか!」
「開き直りやがった!!」
「あ、後、油断も誘える上に注意も引き付けるから、奴らと戦うベストスタイルなんです!」
（それだけ言えば良かったんじゃ・・・）
ここまで来るといっそ清々しい告白に面食らいながらも総二は無理矢理自分を納得させる。
「ま、まぁ良いや。理由があるんだし・・・」
「ですよね!ロリっ子かわいいですよね!」
「・・・ まぁ、あの怪人も気になるけど。」
サラッと受け流して総二は本命の質問をトゥアールに問いかける。
「トゥアールとナフェールの事について教えてくれないか?」
「待ってました!しかも二人ご指名なんて総二様の欲ば」
「フンッ!!」
「リストンッ!?」
愛香のエルボーが見事トゥアールの鳩尾に炸裂し、トゥアールが悶

絶する中、ナフェールが代わりに説明を始める。
「お気づきかもしれませんが、私達はこの世界の人間ではなく平行世界からここに来ました。」
　ここからのナフェールの話を噛み砕いて説明するとこうだ。平行世界は無限に存在しており、そのほとんどが別の世界を知らない。だが、ごく稀に突出した科学力を持つ世界が存在し、属性力はそんな世界で生まれた心の力で、発達していくテクノロジーが抱えるエネルギー確保の問題を解決したのが人の心の力をエネルギーに転用することであった。属性力は人の趣味嗜好ありとあらゆるものに介在し、無限に存在する。一人一個ではなく、いくつも存在する場合もある。このエネルギー、属性力が奪われると一生その属性力の空白に肉体が支配され、自分の趣味に没頭出来なくなる。やろうとしてもやれない。まさしく残酷な事であろう。もし、総二と貴理矢が下手を打っていたらツインテールを奪われた人々は二度とツインテールを結べなくなっていたのだ。
「そう言えば総二様。今日の戦闘後何か拾いませんでした？」
「そう言えばブレスに薄緑色の変なのが」
　するとブレスが輝き、ポンと正八面体の結晶が出てくる。「これは属性玉（エレメーラオーブ）と言うもので、あの怪人が何に打ち込み、何に魅せられ、何を欲したのか。それらの精神の力が凝縮されたのがその属性玉です。ちなみにそれは人形属性（ドール）ですね。」
「・・・　つまり総二の場合は。」
「ツインテールに人生かけるって・・・。」
「じ、実際強かっただろ!!」
「そう、ツインテール属性は元々、属性力の中でも最大級の力を持つ不思議な属性なんです。」
「ツインテールが・・・　最強・・・　!?」
　パァァと総二の顔が輝く。何せ自分が愛したツインテールが最強と呼ばれたのだ。大袈裟だがこの日のために総二は生きていたと言っても過言ではない・・・　と思った。
「なら俺はあれか。バイク属性って奴か。」

「そうですね。ただレーザーは少しの属性力でも稼働出来る分出力は外部デバイスに依存しているのでテイルレッドと比べると性能は見劣りします。」
「だからサポート役ってことね。」
　貴理矢はガシャットとゲーマドライバーを見る。ナフェールは貴理矢に言う。
「でも、データが集まれば私がその都度改修していくので強くなっていきます・・・。精一杯サポートさして頂きますので・・・。」
「ん、任せた。つまり戦っていけば俺もいつか人型に・・・。」
　貴理矢がレベルアップを夢見ているとズサーッとトゥアールが床を滑ってきた。また何か変なことを言って愛香に殴り飛ばされたのだろう。
「つまり、あのアルティなんちゃら平行世界からあんた達と同じように来て属性力を狙ってるのね？」
「ふぁい・・・　奴らが・・・　私達の世界を滅ぼした張本人ですし・・・。」
「「え。」」
　いきなり飛んできたとんでもない発言に場が凍る。
「エレメリアンの組織〝アルティメギル〟。彼らによって私の世界の住人は全て属性力を奪われました。」
「エレメリアンの属性力強奪の被害は第三者にとっては実感がしにくく、全世界の総力をあげるべきところで二の足を踏んでしまったのです。」
「まぁ・・・　確かに・・・。」
「あんな事言われて本気で対策するかと言われるとな・・・。」
「私達は早めの対策で何とか全ての属性力を奪われずにすみました。」
「一度奪われた属性力はもう元には戻りません。生産性の復讐ですが、この力を持った以上私達は奴らを止めたいのです。」
　今までと打って変わって真剣な眼差しに総二と貴理矢の二人はいきなり今自分が持っているアイテムの重みが増したように思えた。だが二人は互いにトゥアールとナフェールに言った。
「まぁ。思惑は随分違うけど。ありがたく使わせて貰うよ。」

「任せろ。ノリノリでレッドをサポートしてやるよ。」
「はい！遠慮無くお使い下さい！この身体!!」
　トゥアールが真面目な雰囲気をぶち壊す発言をした瞬間愛香のジャーマンスープレックスが炸裂する。
「そういや、他に適格者っていねーの？」
　貴理矢が伸びているトゥアールにふと疑問に思った事を問うと、トゥアールは倒れたまま答える。
「いや、判明していますし、ギアはもう一つあるんですが・・・。その、総二様のような正しい心を持った人ではありませんでした。そう。まさしく非道な蛮族・・・！ギアを渡せば必ずアルティメギル以上の脅威になるでしょう・・・！」
「そうか・・・ツインテール好きなのにそんな悪党がいるなんて悲しいな・・・。」
「ええ・・・もうマジ信じられません。あ、そうだ総二様。」
　同じ趣味の人間に悪党がいたことで少し残念そうな総二にトゥアールが起き上がって問い掛ける。
「総二様をバックアップするためになるべく行動を共にさせて欲しいのです。寝食も。」
「う、ウチに泊まるのか!?」
「はい！アルティメギルの刺客はまだまだ来ますし、基地の建設も急務なんです。」
「でもおばさんどう説得すんのよ？」
　貴理矢が尋ねるとトゥアールはエッヘンと胸を揺らして自慢気に答える。
「お任せ下さい！もう考えてあります！私は外国から留学してきた同級生で見知らぬ土地で怯える私を総二様が騙し拐って監禁」
「総二。一人で説得してきてくれ。」
「そうするわ・・・・。」
「アレェ!?」
　どう考えてもアウトな提案をするトゥアールをほっといて総二は考えを巡らす。

（んー、留学生って事は採用してホームステイってのが無難だよなぁ）

母を説得する文句を考えながらドアを開けると、そこには母、未春がいた。

「話は聞かせて貰ったわ!!」

「聞いてんじゃねぇぇぇぇ!!」

手遅れだった。

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　Ｎｅｘｔ　Ｇａｍｅ……

俺、宣戦布告されます。／Ｎｅｗ　Ｓｔａｇｅの幕開け

「息子のプライベートを何だと思ってんだよ!?」
　ドアの前に立って話を盗み聞きしていた母、未春に総二が食って掛かる。しかし未春は笑顔で流す。
「愛香ちゃん以外の女の子を連れてきたから、面白展開になると思って。」
　どうやら貴理矢の気を引く作戦は失敗しており、全て感付かれていたらしい。そもそも妙なところで鋭い母だ。こっそり帰ってこれたと思うのが間違いだったのかもしれない。
「ど、どこまで聞いた・・・？」
「ニュースでやってた事件貴女達が解決したんでしょう？とうとうこの日が来たのね・・・。属性力っていう人間の精神エネルギーを狙って未知の生命体〝エレメリアン〟の組織〝アルティメギル〟がこの世界に攻めてきて、総ちゃんがテイルギアを装着して戦うんでしょ？」
（かっ・・・　完全に理解してる!!）
　すらすらと先程の会話をかいつまんで未春は語る。その理解力の鋭さに総二はただただ驚くばかりだ。
「・・・　夢だったのよ。」
　驚く総二に未春は嬉しそうに、そして何処か悲しそうに語りかける。
「母さんはね。中二病をこじらせたまま大人になった人間なの。世界を守るヒロインになる夢は叶わなかったけど、その夢はへその緒を通じて貴方に全部託したから。」
「生まれる前の我が子に何て事!?」
　それは夢ではなく呪いではないのか。総二が苦悶するなかそれでも未春は続ける。
「そして死んだ父さんもまた、末期の中二病患者だったのよ。二人は

真逆のシチュエーションを夢見て何度と無く反発し合ったわ。でも・・・ そんな時、総ちゃん・・・ 貴方がお腹の中にいると分かったの。」
「わあああああ!!知りたくなかったその面白出生秘話!」
子が一番知りたくない父の秘密、そして両親が結ばれたのはまさかの出来ちゃった婚。こんなもの立て続けに聞かされればグレる事待ったなしである。
「ちなみに貴方がなんで総二かと言うと「あー、ホント中二の頃が一番楽しかった」という意味をこめて総二よ。」
「グレるぞ。」
ただでさえ中二病の謎妄想のデキ婚だけでお腹一杯なのに自分の名前の由来を聞かされた総二は完全にグロッキーになった。最悪である。恐らく常人なら家を飛び出す所だ。総二がダウン寸前になりかけているとトゥアールがひょっこりと顔を出して未春に話しかける。
「おのー、よろしいでしょうか。」
「ちょっ、おまっまだ」
貴理矢が止めようとしたが未春はトゥアールを見て、笑顔で言う。
「話は聞かせて貰ったわ。トゥアールちゃん。」
「実は私も聞かせていただきました。お母様・・・ 総二様にはお話しましたがここにナフェール共々住まわせて欲しいのです。」
「断る理由がないわ。」
「後出来ればこの地下に研究所を。」
「どんどんやっちゃって!たまに見せてね。」
先程の三人の心配が杞憂になるほどトントン拍子に話が進んでいく。三人がおいてけぼりを食らう中、トゥアールは未春に提案する。
「それとお母様、もう一つお願いが。今から『困ったわね。予備の布団がないのよ。そうだ総二のベッドで一緒に寝るといいわ!』と言って欲しくて。」
「ああもうトゥアールちゃん!貴女みたいな人が異世界から来たとか嬉しい!でも困ったわね。予備の布団がないのよ。そうだ総二のベッドで一緒に寝るといいわ!」

（ボイスレコーダーみたいに再生した!!）
流石にこれは見過ごせず、愛香が割って入る。
「ちょっと未春おばさんよく考えて！こんな女同居させたらそーじの貞操が！」
「願ったり叶ったりだわ。総ちゃんが押し倒されても私は痛くも痒くもないもの。」
「おい親！」
未春の発言に総二がツッコミを入れると貴理矢は肩をポンと叩いて言う。
「多分お前が生身の女性じゃなくてツインテールにしか目がいかないから未春おばさんなりの心配だと思うぞ。」
「余計なお世話だよ！」
「トゥアールちゃんはいい目をしてるわ。童貞食いたくてムラムラしてる節操なしの女の目。」
「お言葉ですがお母様。私は節操無しではありません。総二様一筋です。」
「前半部分も否定しなさいよ!!」
と、てんやわんやしたのが昨日の話。この時愛香はトゥアールがおちゃらけてはいるものの、肝心な所、属性力が狩尽くされた世界でテイルギアの核となるツインテール属性を何処から入手したのかを明かさなかった。トゥアールは何か大事な事を隠していると感じたのだ。
「ってことでそーじ！あの女信用しちゃダメだからね！昨日の説明といい・・・ 絶対何か企んでいるわ！」
「企んでるは言い過ぎだろ。」
総二がそう言うと愛香は突然泣き出しそうな声音で訴えかける。
「どうしてそこまでアイツを信用するのよ!?胸があるから!?」
「い、いやそういう訳じゃ。」
「総二は根っからのお人好しだからな。信用するのは胸とかじゃねーと思うぜ。」
思わず口ごもる総二に貴理矢がフォローを入れる。

そんなに気にしていたのか。悲痛な訴えに総二は今度から口喧嘩で胸をネタにするのは控えようと感じた。しかし、それよりも総二には気になる事があった。
「この写真は見たことなかったなぁ。」
「決めた！俺は今からテイルレッドたんのお兄ちゃん！」
「かわいいなぁ。かわいいなぁ。」
「うへへ剣持って可愛い俺も斬って～！」
この後ろでタブレット等でテイルレッドを見て気色悪い発言を繰り返す男子共である。正直お望み通り数千度の灼熱の剣でぶった斬ってやりたいくらいである。彼らの発言を聞くたびに総二に寒イボが出来る。
「あー、もうたまんねぇー！」
「うおわあああああああッー!!!」
とうとうタブレット越しにテイルレッドにキスをしようとする蛮行に走る男子が現れた。電子データの写真で本人ではないと分かっていながらも悪寒が頂点に達した総二は半ば反射的に持っていたペットボトルをその男子に投げつけた。
「あいっでぇ!?何すんだ観束・・・ってははーんさてはお前ツインテールが好きだからレッドたんを独り占めしようって魂胆か!!」
「ちっ、違うわ!!お前らそんなちっちゃい女の子にそんな事して恥ずかしくないのかよ！」
「恥なんてさっきの集会の時に捨てたわ!!」
「いや捨てんなよ！」
等と熱い舌戦を繰り広げた学校が終わり、その帰り道。舌戦で疲れた疲労感となんやかんやで名前を覚えていてくれた嬉しさを感じながら三人は帰路についていた。
「俺の画像・・・ネットでガンガン拡散されてた・・・色んな人に応援されてるのは嬉しいけど・・・」
「今日帰ったらトゥアールを締め上げてネットに散らばったファイルを消させれば良いのよ。」
「そういや部活どうするよ？」

「毎日戦う訳じゃないんだし普通に選びなさいよ。」
　貴理矢の質問に愛香が返す。だが、総二は愛香に言う。
「けどそういう心構えでいないと今日にでもまた現れるかもしれないんだぜ？」
「まさかぁ。昨日の今日で」
　愛香が言いかけた瞬間空に大きな怪人が浮かび上がる。と言っても超巨大なスクリーンに映し出されたものだが。
《この世界に住まう全ての人間に告ぐ。我らは異世界より参った選ばれし神の徒(ともがら)、アルティメギル。我らは諸君らに危害を加えるつもりはない。ただ各々が持つ心の輝きを欲しているだけなのだ。抵抗しなければ命は保証する。》
　龍のような外観の怪物がこれ見よがしな玉座に座り、足を組んで演説している。
《だが、どうやら我らに弓引く者がいるようだ・・・　抵抗は無駄である！それでもあえてするならば・・・　思う様受けて立とう！存分に挑んでくるが良い！》
「おいおい。昨日の今日で宣戦布告ってノリが良すぎるだろ・・・・。」
　貴理矢は苦笑いを浮かべる。空に浮かんだスクリーンとは別に他の家々からも同じ声が聞こえる。まさかと思い、総二が携帯を起動させると、同じような映像が映し出されていた。
「放送電波全部に介入してるのか!?」
「そんな滅茶苦茶な・・・・。」
「アイツら本気で地球を侵略するつもりなのか・・・　!?」
　脅威のテクノロジーに三人が愕然とするなか映像が切り替わり、今度は亀のような怪人が現れる。
《ふはははははは!!我が名はタトルギルディ！ドラグギルディ様の仰る通り抵抗は無駄である！綺羅星と光る青春の輝き・・・　体操服（ブルマ）の属性力を頂く!!》
　すると後ろから戦闘員が申し訳なさそうにタトルギルディに耳打ちした。
《・・・　なにぃ、この世界では今はほとんど存在せぬだとぉ!?おのれ愚

かなる人類よ！自ら滅びの道を歩むかあああああ！》
　絶叫する怪人とずっこける三人。あの演説から求めるものの落差に絶句する。するとトゥアールとナフェールから通信が入る。
『総二様！貴理矢様！今のをご覧になりました？』
『アルティメギルが現れました。今位置を教えますので！変身を！』
　どうやら隣町の高校にタトルギルディは現れたらしい。というか隣町の高校未だにブルマなんだ・・・　と思いながら総二と貴理矢は互いの変身アイテムを構える。
『爆走バイク！』
『貴理矢様は変身後、レベル2になって総二様、テイルレッドを目的地まで運んで下さい！』
「あいよ。行くぜ総二！」
「あ、あぁ。て、テイルオン！」
「1速！変身！」
『ガシャット！レッツゲーム！メッチャゲーム！ムッチャゲーム！ワッチュアネーム!?アイム　ア　仮面ライダー。』
　総二は発動のため、昨日話の合間に決めたキーワードをまだ恥ずかしさはあるものの言い、変身する。貴理矢もレベル1に変身し、ゲーマドライバーのレバーを開く。
「2速！」
『ガッチャーン!!レベルアップ！爆走！独走！激走！暴走！爆走バイク！』
　フロントユニットとリアユニットが装甲がパージされたレーザーに接続され、仮面ライダーレーザーレベル2が現れる。
「さぁ。乗りなレッド！」
「あぁ！」
　レッドがレーザーに跨がるとレーザーは爆音を上げて目的地へと向かう。ひどく、スケールの小さな侵略を潰しに。
「クックックッ。ツインテールの属性力回収が我が使命だが。その前に少し寄り道させてもらおう。」

タトルギルディはその巨体を突然の怪物の襲来に怯えるブルマを着けた女子生徒に向ける。女子の健康的な足を極限にまで露出させ、色香を放つブルマにタトルギルディはギロリと狙いをつけて言う。
「クックックッ。さぁ俺にブルマを嗅がせろォォォ！」
今まさに怪人の毒牙が女子に襲いかからんとした瞬間だった。
「今だレッド！俺のガシャットをスロットに挿してスイッチを押してくれ！」
「えぇと、これか!!」
『ガシャット！キメワザ!!』
一台の黄色いバイクの赤い美しいツインテールの幼女が柵を飛び越えて運動場に現れる。
「ぬっ、現れたなテイルレッド！頼むがブルマ、ブルマをはいてk」
「グランドブレイザー!!」
高速で近づくレーザーに乗っていたテイルレッドは既に必殺技の構えをとっており、すれ違い様に炎の剣でタトルギルディを一閃の元、切り捨てる。
「ご、ごふぅ!?ぐっ、て、テイルレッ」
『ＢＡＫＵＳＯＵ！ＣＲＩＴＩＣＡＬ　ＳＴＲＩＫＥ！』
「もう一つオマケっと!!」
そして追い討ちと言わんばかりにレーザーのマフラーから強力な爆炎が吹き出し、その爆炎がタトルギルディを焼いた。
「ぶ、ブルマァァァァァァァ!!」
哀れ、タトルギルディはあっという間に爆散した。レーザーはいつものようにドリフトターンの後、停車する。
「ふぅ。」
「よしっ、やったなテイルレッ、ってうおおっ!?」
敵を倒し、一息ついたのも束の間。今度は女子高校生達がテイルレッドに押し掛けてくる。
「うわっ、うわうわ!?」
「ちょっ、あいた！こけた！俺今バイクだから起き上がれないんだけど!!だっ!?踏まないで踏まないで！」

テイルレッド目掛けて押し寄せた女子高生になすすべもなくレッドは囲まれ、そしてレーザーはバタンと倒れてジタバタする。
キャーキャーと黄色い悲鳴があちこちからわき、自分より大きい少女にもみくちゃにされながらテイルレッドは叫んだ。
「わぁーん！もう帰るー！道を空けてー！」

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　Ｎｅｘｔ　Ｇａｍｅ・・・

俺、新しい戦士と出会います。／現れるＮｅｘｔ　Ｃｈａｌｌｅｎｇｅｒ

『名前を！名前を教えてください！』
『て、テイルレッドで・・・ うわっちょっ』
『素敵です！お姉様と言わせて下さい！』
『妹に決まってるでしょハァハァ』
『一緒に着替えっ子しましょう！』
『わぁーん！もうおうち帰るー！』

タトルギルディとの戦いから時は流れ次の日の朝。その朝のニュース番組で変身した総二の特集が組まれていた。一昨日とは比較にならないほど鮮明な映像がテレビで流れる。今流れているのは涙目になりながら手足をばたつかせるも女子生徒にもみくちゃにされるツインテールの幼女と女子生徒に足蹴にされるバイクの姿だ。
「なんで動画まで撮られてるんだよぅ・・・・」
「いーじゃねーか総二。自分なんて踏まれてるぞ。」

リビングには当たり前のように総二の他に貴理矢と愛香がいる。愛香はテレビの映像を見る度に段々と顔が険しくなっていく。
「そーじ・・・ 昨日あんな事されてたの？女生徒のおっぱいに顔埋めて・・・ 喜んでたのね・・・。あっちにもこっちにもおっぱい・・・ 貧乳が一人もいないじゃない！」
「そこかよ！」
「いーじゃねーか。その胸の無さが他の女子にはないお前のアイデンテ」
「フンッ!!」
「がふっ!?」

貴理矢の腹に愛香の掌底が叩き込まれ、血ヘドが舞う。そんな中、総二は自分の顔面を手のひらで覆い、憂鬱な言葉を吐き出す。
「まさか男の身で盗撮ネット流失に怯える日が来るなんて・・・。」
「アルティメギルの宣戦布告って全世界に配信されたのよね？」

「ええ。今頃どの国も小騒ぎでしょうね。」
「あ、ＮＡＳＡが出てきましたよ。」
　ナフェールが指差す先にはＮＡＳＡの偉そうな肩書きの人物が何やら語っていた。
「宇宙人と間違えたのかしら・・・？」
「早めに・・・一気に片付ければ問題無いと思ったのに・・・。」
　段々と大事になってきたことで総二が頭を抱える中、親である未春はどこ吹く風と言わんばかりにテレビのニュースを見て微笑む。
「フフフ。可愛いわねぇテイルレッドちゃん♪」
「やかましー!!」
　中二病真っ盛りの母からすれば息子と娘の晴れ姿だから感慨深いものがあるのであろう。そんな総二の母への反抗期までへのメーターが一目盛り増えたところでパソコンをいじっていたトゥアールが総二に話し掛ける。
「総二様！総二様！見てください！テイルレッドちゃんのまとめブログやＷｉｋｉが出来てますよ！」
「しかもファンサイトや考察ページもありますね。ネットもこの話題で持ちきりです・・・。」
　トゥアールとナフェールがパソコン一杯に広がるサイトを見せてくる。まだ二回しか変身してないのにすごいラインナップである。
「れ、レーザーのは？」
　貴理矢が内心ワクワクしながら聞くと途端に二人は顔を反らし、小声でボソッと呟く。
「・・・て、テイルレッドのまとめの一項目にちょろっと・・・書いてありますね・・・。」
　見れば〝仮面ライダーレーザー〟とテイルレッドの膨大なデータの中にちょこんと書いてあり、これまたシンプルに〝テイルレッドを支援するためのデバイスと思う〟と書いてあった。
「人間扱いされてない・・・だと・・・？」
「そりゃバイクに変形するなんて普通思わないでしょ。」
「うっ!?」

只でさえサイトの項目で膝に来るくらいダメージを受けていた貴理矢に愛香の非情な会心の一発が入り、貴理矢は膝からガクリと倒れ込んでしまう。
等やっていると未春が突然立ち上がってどこから取り出したマントを纏い、トゥアールに問い掛ける。
「・・・ トゥアールちゃんちょっと。総ちゃんがまだ童貞のままのようだけど・・・」
「面目次第もございませぬ。」
すぐさまトゥアールも反応し、膝をついて頭を垂れる。
「私がどれだけ寛大でも三度も四度も失敗を許す慈悲は持ち合わせていなくってよ・・・・？」
「はっ、今夜こそ必ずや!!」
その後嬉しそうに互いに抱き合う二人を見ながら母さん楽しそうだなぁと思う総二であった。
「あ、そう言えば。トゥアールとナフェールが作った秘密基地、すんごい中二臭かったわねぇ。無駄に壁に計器とかついてるし。」
「あぁ。何故か喫茶店の奥にエレベーター作ってたし。」
愛香の言葉に貴理矢が反応する。総二は工事をすると言った夜、地下から妙な工事音が聞こえた事と、武器開発室で「アンチアイカシステム」なる文字を見つけた事を思い出しかけたが、忘却の彼方に追いやる事にした。
「この前は準備不十分であれほどの被害になりましたが、今後はすぐにエレメリアンを探知できますので〝現れたらすぐ倒す〟を徹底しましょう。」
「警察や軍隊と動いてるみたいだけど・・・・。」
「・・・ どのみちテイルギアとゲーマドライバー以外では通用しませんので・・・・。」
総二はふと脳裏にちらついた不安を全員に吐露する。
「・・・ 出来るのかな・・・ 世界規模で攻め込んでくる相手に・・・。」
総二がうつむいているとナフェールが総二の手を取り優しい声音で言う。

「その為の秘密基地です。これからは地球の裏側でも一秒でもいけます。それに総二様と貴理矢様は私達が全力でサポート致しますので。」
　その言葉に続くように貴理矢が総二の首に腕を回す。
「お前は一人で戦ってるわけじゃねぇ。自分もお前と共に戦ってんだ。」
「そうですよ。ですから元気出して下さい総」
「何してんだ!!」
　服を脱ぎながら総二に迫ろうとしたトゥアールに愛香のアッパーカットが決まる。そんな光景に総二は思わず吹き出す。自分だけ不安がって馬鹿みたいだ。取り敢えずはトゥアールの言う事を信じ、やれるところまで戦おう。
　総二は再びそう決意した。

「って、決意したはいいけど。」
　テイルレッドに変身した総二は叫んだ。
「なんで律儀に毎日毎日一体ずつ出てくるんだテメーらはァァ!!」
「あぁ。ようやくお会い出来ましたねテイルレッド!」
　あの後学校に行って帰宅したらエレメリアン出現の報告を受けて地下基地から出撃したのだ。まるで狙いすまされたかのような絶妙なタイミングに恐怖を覚える。
「くそっ、やるしかない!」
　今回貴理矢、レーザーは来ていない。部活を観て回ると言っていたので少し遅れて来るらしい。炎の剣、ブレイザーブレイドを出そうとリボンを叩くと目の前のエレメリアンが自己紹介をしてくる。
「私はリボンに魅せられし者、フォクスギルディ。どうかお見知りおきを美しき女神よ。」
「誰が覚えるか!!」
　狐を思わせるシャープな外観。今まで筋骨隆々だったのが連続し

て来ていたので少し新鮮な気持ちになる。しかもこれまた良い声してるのがイラッとする。
「フッ・・・ 可憐でありながら力強い素敵なリボンだ。見ているだけで心がとろけますよ。」
もう問答無用。さっさと倒させてもらおう。ブレイザーブレイドに力を込める。しかしフォクスギルディはその炎の剣を突き付けられても不気味な程落ち着き払っていた。
「屈強な同胞達を倒した剣がリボンから生まれしものだったとは。運命を感じます。」
そしてフォクスギルディは何処からともなくリボンを取り出し、宙に投げつける。新体操の演技のようにくるくると輪を描いてテイルレッドの元に飛来するリボン。レッドも警戒するが、レッドの周りを何周か回るとすぐにフォクスギルディの元に戻る。
「・・・ ?」
「おお・・・ これほどのものとは・・・ ぐぉふっ」
突然吐血するというオーバーリアクションを見せるフォクスギルディ。もうぶった斬ってしまおうか、とテイルレッドが思った瞬間。
「ハァ、ハァ・・・ !結晶せよ!我が愛!」
フォクスギルディの体から放たれた属性力が所在なさげに宙を待っていたリボンに注ぎ込まれ、リボンが変形し始める。
「お、おお?」
リボンは徐々にその姿形を変え、とうとう一人の人間、しかも少女の形となった。
「何だこりゃ・・・ ってよく見たら俺じゃねーか!!」
それはまさしく・・・ テイルレッドの等身大フィギュアであった。
「リボンとは結ぶもの・・・ 特にツインテールを引き立たせるには無二の存在。貴女のその神々しいツインテール属性・・・ 僭越ながら私の属性力にて結ばさせて頂きました。」
「お、俺の力をコピーしたのか!?」
「まさか。鏡に映した程度の事。ただの人形です。まして、リザドギルディ程の強大な人形属性（ドール）を持たぬ私では自ら動かすこと

も出来ません。ですが外見だけでならほら、この通り。」
　壊れ物でも触るかのようにそっと、人形に触れるフォクスギルディ。その瞳はまるで戯れる孫をそっと慈しむ老人のそれである。あまりにも優しい、そしてだからこそそれはテイルレッドにとって。
「ひ、ひいいいい……」
　あまりにおぞましい光景であった。
「今回はどうやらあのバイクのお邪魔虫もいないようですし…　はっ!!」
　気合い一閃、つま先立ちで回転したかと思うと、恭しくフィギュアの手を取り、ダンスを踊り出す。確かにツインテールとダンスの親和性は高い。まるで自分があの怪人と踊っているように思える。だからこそ…　気持ち悪い。
「うっぎゃあああああ!!!」
　思わずテイルレッドは悲鳴を上げる。だが、悲鳴をあげてもその凶行は容赦なく続く。寧ろ悪夢が幕を開けた。
「ふっ。これ、走ってはいけません。まだ身体が拭き終わってないのですから、湯冷めしてしまいますよ。」
「想像の中で俺に何してんだてめぇぇぇぇぇぇ!!」
　溶け込んではいけない妄想という名の自然と調和したフォクスギルディにテイルレッドは叫ぶ。百パー彼の妄想の中でのテイルレッドは服を着ていない。
「ああ、お待ちなさい！せっかくお風呂に入ったのに、アイスキャンディーでそんなにべたべたにしてしまって、いけない子ですね、ふふ。」
「ぬごあッー!!」
　尚も続く狂気の産物にテイルレッドは頭を抱えて地面を転がる。そんな様を見兼ねたのかトゥアールから通信が入る。
『総二様！そんな、紛い物、構わず粉々にしてしまえば良いんです！』
「あ、ああ……。」
『今こそ属性玉変換機構（エレメリーション）を使うときです！属性力で作られたそれは人形、なら初戦で回収した人形属性（ドール）が有

効なハズです！』
　確かにあの人形を破壊すればこの生き地獄から解放されるであろう。奴が言ってた通りリザドギルディの人形属性の方が強力であるハズだ。
「破・・・　壊・・・」
　奴の繰り出す狂気の沙汰を直視すれば精神が蝕まれる。だがあの人形のツインテールを見た瞬間、テイルレッドの呼吸が荒くなる。奴は外観は完璧と謳うだけあって見事なツインテールの再現度だ。本物の輝きには及ばないだろうが、それでも十分過ぎるほど美しい。
「ぐっ・・・　！」
　足が震え、身体が動かない。あんな人形、指一本で破壊出来るのに。
「う、うおおおおお!!出来ねぇ！俺にはあのツインテールを壊す事は出来ねぇぇぇぇぇ!!」
　偽物だと。頭で分かっていても破壊することは出来なかった。あれはツインテール。ツインテールに罪はない。それを裁こうとするのはあまりに傲慢に思えた。
「やはり貴女は本物だ。」
「何・・・。」
「これはただの人形です。ですが貴女は破壊出来ない。ツインテールを愛する者・・・　最強のツインテール属性を持つ貴女には、ツインテールを破壊出来ないんですよ！」
「くっ・・・　！」
「ああ。そうかい。なら自分の出番だな！」
　次の瞬間フォクスギルディの周りの地面が弾ける。見ればテイルレッドの後ろに仮面ライダーレーザーレベル1がいた。
「レーザー・・・。」
「悪いが、自分はテイルレッドと違ってツインテールを破壊するのに躊躇はねぇ。」
　レーザーはフロントユニットの銃口をフォクスギルディに向ける。
「おのれお邪魔虫め・・・。」
「悪いな。コイツのサポートが自分の役目なんでね。」

「レーザー、ツインテールは・・・」
「分かってる。でもこうしなきゃお前がヤバい。」
レッドの悲痛な視線を受けながらも、レーザーが非情に徹し、引き金を引こうとした瞬間だった。
『レッツゲーム！メッチャゲーム！ムッチャゲーム！ワッチュアネーム！アイム　ア　仮面ライダー。』
突然横から何者かがレーザーに襲い掛かる。乱入者の蹴りがフロントユニットを蹴り飛ばし、銃弾はあらぬ方向に着弾する。
「何・・・ !?」
「えっ・・・ !?」
その乱入者は黒いはね上がった髪のようなヘッドフォルム、鋭い目付きを除けばボディデザインはほぼレーザーと同一であった。何より腰にはゲーマドライバーが装着してある。
「もう一人の・・・ 仮面ライダー・・・ ？」
「何だお前・・・ !?ぐあっ！」
突然の乱入者はレーザーの質問に答えず痛烈な回し蹴りでレーザーを吹き飛ばす。そしてそのままその乱入者はフォクスギルディの方を向き、加工音声で言う。
《コイツは私が受け持とう。君は君が為すべき事をしたまえ。》
「・・・ 誰かは知りませんが一応感謝はしておきましょう。では、続きを・・・。」
「んのやろっ・・・ ！」
レーザーがフロントユニットとリアユニットを構え、乱入者に向ける。すると乱入者はレーザーの方に振り向き、ゲーマドライバーのレバーを開いた。
『ガッチャーン！レベルアップ！』
『マイティジャンプ！マイティキック！マイティアクショ～ンX！』
レーザーが放った銃弾は全てパージされた装甲に弾かれる。弾かれた弾が地面に突き刺さり、土煙を上げる。そして土煙が晴れるとそこには紫色の装甲に包まれたスマートな人型になった乱入者がいた。
《私は仮面ライダーゲンム。》

そう言うと、乱入者・・・ゲンムは先程に比べ、遥かに素早いスピードでレーザーに近づくと、勢いそのまま飛び膝蹴りをレーザーにお見舞いする。
「仮面ライダーだと・・・・ !?じゃあなんでエレメリアンの味方なんぞ・・・・ !」
《答える義理はない。》
『ギュッ　イーン!』
ゲンムの右腕に着いている紫色のユニットが回転し、チェンソーのような刃を展開すると力任せにレーザーに叩きつける。火花が散り、レーザーがよろめく。反撃にとリアユニットを繰り出すが避けられ、カウンター気味に膝蹴りを叩き込まれる。
「ぐおっ!?」
《さぁ私を楽しませろ。》

「ああもう!どうなってんのよ!総二の奴はこんな時にツインテールこじらせるし!変な乱入者は来るし!というかあれ、ゲーマドライバーじゃないの!?」
「た、確かにその通りです。けどなんで・・・・ !?」
その頃基地では突然の不測の事態に大慌てになっていた。テイルレッドは敵の精神攻撃で動けず、レーザーは乱入してきた敵の相手に手一杯だ。そんな状況をトゥアールは沈痛な面持ちで見ている。
「き、基地からミサイルとかで攻撃出来ないの?このままじゃ二人ともやられちゃう!!」
『ぎゃあああああ!?やめろぉぉぉぉぉ!!』
『いでっ!このっ、どわっ!?』
モニターではテイルレッドは敵の精神攻撃に苦しみ、レーザーは乱入した敵の猛烈な攻撃に大苦戦を強いられている。まさしく大ピンチである。
「・・・ こうなっては、仕方ありません。」
「・・・ トゥアール?」

トゥアールら先程と打って変わって深刻そうだが、冷静な面持ちで愛香に向き直る。
「愛香さん。頼みがあります。」
「な、何？あたしに出来ること!?二人を助けられるならなんだってやるわ！」
「変身してくれませんか。」
「・・・・　へ？」
予想だにしないトゥアールの言葉に愛香は固まる。
「トゥアールさん、それは・・・・」
「ナフェール。貴女は静かに。ここは私に」
ナフェールが思わず抗議しようとしたが、トゥアールの有無を言わさぬ口調に黙ってしまう。
「前に言いましたよね？この世界にもう一人テイルギアを装着出来る人。それが、愛香さんなんです。」
「嘘・・・　だって世界に二人しかいないんでしょ？それが・・・　総二とあたしなんて・・・　出来すぎじゃない。」
「同じツインテール属性を持つものだから引かれあった。そういう運命だったのかもしれません。」
運命。その言葉が総二と自分を結びつけるように思え、愛香は思わず顔を赤くする。だが、愛香はふと前にトゥアールが言っていた発言を思い出す。
「・・・・　あんたもう一人は蛮族で、渡したら世界が滅びるとか言ってなかったっけ。」
「え？事実でしょう？」
トゥアールの顔面にパンチがめり込む。だが愛香はそれでも覚悟を決めたように言う。
「そうね。あたしは蛮族かもしれない。でもそーじを助けることは出来る！」
「な、なんかかっこいい事言ってる・・・。」
「あたしだってあんな変態達と戦うのは嫌よ！でも戦力は多い方が良いでしょ!?それなのに・・・・」

愛香の抗議にトゥアールは顔を伏せ、告げる。
「愛香さんを危険に巻き込みたくなかったんです。僅か数日で何度も殺されかけましたけど。愛香さんは・・・この世界で出来た・・・大切な友達ですから・・・・」
「で、本当の理由は?」
「テイルギアの力を維持するためには云々とか嘘ついて総二様といかがわしい事するつもりだったので、テイルギア渡すと愛香さんにも同じ事しないといけないじゃないですか。」
「このド変態女がぁぁぁぁ!!あんたはなんでいっつもそうエロいことばっか考えてるのよ!」
愛香は怒りと共にトゥアールの頭を掴むと思い切り床に顔面を叩きつける。だが、押さえつけられながらもトゥアールは反論する。
「メスがオスに発情して何が悪いんですか?!」
「開き直るにしても言葉を選べェ!あたしが嫌いなのはよーく分かったわよ!でも今はそーじと貴理矢を助けたいの!お願い!」
「・・・別に嫌いなんて思ってませんよ?大切な友達、それは嘘ではありません。」
先程とは打って変わってこちらの目を見つめる真剣な言葉に思わず愛香は力を緩める。
「・・・何よ。」
「この世界を守るためとは言え、これは私達の復讐です。直接関係無いお二人に戦いを強いるだけども胸が張り裂けそうなのに、そのご友人を巻き込んでしまったとあれば、お二人はさぞお恨みになるでしょう・・・優しい方達ですから。」
トゥアールの言葉に、ナフェールも顔を俯かせる。愛香はその言葉に嘘偽りは無いと感じた。だからこそトゥアールに言う。
「あたしだってツインテールよ。あいつらの標的でしょ。なら、自分から戦える方が安全じゃない。あたしはそーじ程他人を守るのに親身になれないだろうけど。」
「・・・総二様と違って貴女のツインテールは貴女自身の為のものではないでしょう?命と同じ位大切にされてきたツインテールを賭けら

れますか?ブレスをつければもう後戻りは出来ませんよ?」
　トゥアールの最後の忠告だった。大切な友人に踏みとどまるチャンスを与えたのだ。だが、愛香はフンッと鼻を鳴らし、トゥアールを見つめ返して言う。
「あたしは自分の決断に責任を持てないほど子供じゃないわよ。」
「‥‥　分かりました。ナフェール。」
「‥‥　はい。」
　愛香の真摯な眼差しにトゥアールはとうとう折れ、ナフェールから青いテイルギアを受け取り、愛香に差し出す。
「愛香さん。約束してください。何があってもー」
　愛香は真摯な態度で頷く。
「総二様の初めての女になるのは、私に任せて貰えると。」
「おい。」
「時間がありません!いいからウンと言ってください!でなければこれは渡しません!は、まさかこれからヒーローになろうという方がまさか私達を力ずくで倒して奪っていくとでも!?」
「えっ、ナチュラルに私を巻き込まないで下さい。」
　次の瞬間愛香の一撃がトゥアールに炸裂し、トゥアールは顔面を地面にめり込ませ倒れる。隣で涙目で震えるナフェールを無視し、テイルギアを装着すると叫んだ。
「テイルオンッ!」
　次の瞬間そこには青いツインテールの新たな戦士が誕生した。変身した愛香は直ぐ様転送装置へと向かう。
「待っててそーじ、貴理矢!いつまでたっても危なっかしいんだから‥‥　私が側にいてやんないとね!」
　新たな戦士は苦戦する友を救うために戦場へと向かうのであった。

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　Ｎｅｘｔ　Ｇａｍｅ‥‥

俺、心強い援軍を得ます。／ＢＡＮしたアイツがやってくる

閑静な郊外で人類の希望であるテイルレッドと仮面ライダーレーザーは大ピンチに陥っていた。
「絵本を読んであげましょう・・・・ おやおや甘えん坊さんですねぇ・・・。」
「てっめぇ・・・・ ！」
とろけるような甘い声で狂気の沙汰を繰り広げるフォクスギルディ。何が凄いってその克己心だ。いくら本物そっくりの人形とは言え、あそこまで人前で戯れるのは完全に壊れなければならないと不可能であるのに、確固たる己を持って妄想を真顔で繰り出し続けている。
「どはっ・・・ !!」
精神攻撃によって膝をついてしまったレッドの横にレーザーが倒れ込む。
「れ、レーザー!?」
「や、ヤベェライダーゲージが・・・」
貴理矢はレーザーについての説明欄でライダーゲージが０になれば安全面から強制変身解除をしてしまう事を思い出す。残りライダーゲージは後僅かだ。
《どうした?もう終わりか。》
ゲンムが右腕の紫色のユニットを構えたまま、余裕たっぷりにゆっくりと近づく。
「へ、へへ・・・ コイツは大ピンチって奴か・・・。」
「うっ・・・。」
二人が半ば絶望しかけたその時だった。突如稲妻のような轟音が辺りに響き渡る。
「そこまでよ変態!!」
「ぬっ?」

《・・・・》
「へっ？」
「いやなに変態に反応してんだお前。」
　自分が呼ばれたのかとうっかりするテイルレッド。蒼い光が天と繋がったままレーザーとテイルレッドの前に現れ、そして光が収まるとそこには一人の少女がいた。総二と貴理矢に見覚えがある、あの少女が。
「あい・・・　か・・・・　？」
「おまっなんで・・・。」
　まさかの幼なじみである津辺愛香の参戦に二人が驚愕する中、フォクスギルディが乱入してきた少女に啖呵を切る。
「おのれ！何者です!?」
「私はブルー。テイルブルーよ！」
　未だに総二の中で戸惑いのあるそのコードネームを愛香、ブルーは力強く、雄々しく、迷いの無い瞳で宣言した。
《テイルブルー・・・　まだ戦力を隠していたのか。》
「おおお・・・　これはまた、素晴らしい・・・・　命の際に追い詰められたと言うのに何故でしょう、高鳴る鼓動を抑えられない！」
「・・・　ったく、ホントにそっくりで気味の悪い人形ね。でも！」
　愛香は左腕左腕に装着された手甲パーツから薄緑色に光る石を取り出す。
「属性玉変換機構！属性玉・・・　人形属性!!」
　言葉にすると同時に属性玉変換機構が作動する。
「そ、それはリザドギルディの!?」
「さっ、おとなしくしなさい人形ちゃん。」
　テイルレッドの形をした人形が途端に存在感を無くしていく。あれほどリアルに感じた人形ももはや顔写真をマネキンに張り付けたように不自然になり、フォクスギルディの精神攻撃からテイルレッドは解放される。
「ほいっと。」
　そして間髪入れず、無抵抗の人形にフルスイングの拳を叩き込む。

哀れ、人形は砂糖細工のようにアッサリと砕け散る。
「何してくれちゃってんの⁉」
「ば、馬鹿な⁉何の躊躇いもなく破壊するとは！貴女の大切な仲間を模したものですよ⁉」
「仲間ならここにいるじゃない。ね？」
　抗議の声をブルーはあっさり受け流し、レッドにウインクする。大切な幼なじみを戦いに巻き込んでしまったと感じ、頭が真っ白になっていたがどうやらそれは身の丈を越えた気遣いだったようだ。積み重ねてきた万の言葉を越える確かな信頼と絆がここにはある。
「お、おのれ・・・ ですが、どうやらツインテール属性はレッドよりは弱いようですね！ならば貴女の属性力を頂くまで！まずはそのデカリボン、いざ頂戴します⁉」
「冗談！」
　テイルブルーの周囲に展開したリボンをブルーは即座に握り拳で叩き壊す。そのまま頭部のリボンに触れ、レッドと同じように武装を呼び出す。光が弾け、再び集まるとそこには一本の三叉の長槍、ウェイブランスが形成されていた。愛香には総二と違い、普段の喧嘩慣れの分迷いはない。行動に躊躇いはない。確実にトゥアールが言ったように一気に片付けるつもりだ。
《まずい。》
　その非情さを知ってか知らずかゲンムがテイルブルーに標的を変え、妨害しようとした瞬間だった。
「おっとそうはさせねぇぜ！奥の手⁉」
　レーザーはレベル1の固有能力でエネルギーを纏い回転しながらゲンムにぶつかる。ゲージが減少するデメリットはあるものの威力は確かであるらしく、不意を突いた事も手伝ってゲンムを思い切り吹き飛ばす。
《ぐおっ・・・ ⁉》
「へへっ・・・ ざまぁみやがれってんだ・・・ ！」
　レーザーがゲンムを足止めしているなかブルーは水の槍、ウェイブランスを構える。

「戦いは新参でもね・・・！」
　完全解放（ブレイクフリーズ）。ブルーから発射された円柱状に変化した水流、オーラピラーがフォクスギルディを拘束する。
「ぬっ、ぬぅぅぅぅぅ!?」
「ツインテールはあたしの方が大先輩、なんだからッ！」
　次元を穿つ刺突。＜エグゼキュートウェイブ＞が、フォクスギルディを貫いた。
「ぐあああああ!?さ、最後に夢を・・・！また、服を着ないで・・・ 風邪を引いてしまいま・・・ 成る程。リボンにはそんな使い方が・・・・ アーッハハハハハ」
　爆散。彼は最期の最期まで、彼の中のテイルレッドに服を着せないままだった。
《チッ・・・ 撤退するか・・・。》
　ゲンムも三対一は不利と感じたのか姿を消す。
「ふぅー、撤退したか・・・。」
　レーザーは一人地面に座り込む。仮面ライダーゲンム、かなりの強敵だった。あのまま戦っていたら確実にレーザーは倒されていただろう。
「ようし、取材だ！テイルレッドと、あれ？もう一人いる!?」
　戦闘が終わった途端、いけしゃあしゃあとどこからこの場所を掴んだのか取材陣が現れる。
　思わずテイルレッドは身構えるが、ブルーはカメラを構える報道陣の前で三本指ピースで微笑んだ。
「あたしも今日から参戦しま～す、よろしくねっ。二人揃って『ツインテイルズ』ってことで！」
　そしてすぐにレッドを抱き上げ空高く跳躍する。
「お、おい!?」
「いーのよ。〝絵〟は提供したんだから。」
　再びブルーは属性変換機構を発動させる。属性玉、髪紐属性（リボン）。今しがたの戦いで得た能力を勝手知ったるとばかりに使用する愛香。するとテイルギアのリボンからさらに鋭くパーツが伸び、重力

から解き放つための巨大な翼になった。
「おお、これ使える――！空飛べるみたいよ！」
そんなブルーに思わずレッドは目を奪われる。いつも間近で見ていたはずの愛香のツインテールが、空の蒼を受け、一際輝いて見えた。
「ん、どしたの？」
「いや・・・・ その、愛香・・・ ごめん。俺が不甲斐ないばっかりに。」
俺は馬鹿だ。とレッドは感じた。芸能人のように、手慣れた引き際だった。僅かな間でも、十分に写真や映像は撮られただろう。負担や奇異の目が自分だけに行かないよう、敢えてそうしたのだ。今朝の弱音を覚えていたのだろう。
「勘違いしないで。ちゃんと自分で決めて変身したんだから。・・・・ あんな変態達、見てるだけってのもストレス溜まっちゃうからさ。」
「愛香・・・。」
幼なじみの気遣いにレッドが胸を熱くさせている中、一方その頃。
「ちょっ、ちょっとオーイ!?自分！自分忘れてるよ！というか二人揃って『ツインテイルズ』って自分は!?入ってないの!?そりゃノリが悪いってオーイ！」
叫びながら必死でピョコピョコ走っているレーザーがいた。

戦闘から帰還した三人だったが、帰還してそうそう先程の戦闘からは及びつかない半死半生となった女性と隅で怯える女性を目の当たりにした。
「あわわわわ・・・・」
「どうしたの!?トゥアール！まさか・・・ そーじ、アルティメギルの刺客がきちに侵入したのかもしれないわ！トゥアール・・・ 仇はとるからね！」
絶対お前だろという言葉を総二と貴理矢は飲み込んだ。今愛香を刺激すれば何されるか分かったもんじゃない。
「そ、総二様・・・ 気をつけて下さい、世の中には・・・ 幼なじみを騙る凶悪な山賊がいます・・・ 慣れないかっこいい台詞まで言って感動的な場面を演出したのに、有無を言わせずに強奪の大・・・ 悪党・・・。」

ゴッと鈍い音がする。トゥアールは白目を剥いて意識を手放す。
そんな蛮勇を振るっておきながら愛香は思い出したように自分と総二の手首・・・ 赤と青を交互に見比べ、柔らかくはにかんでいた。総二も見比べ、そして貴理矢も引きつった苦笑いを浮かべる。
何て事だ・・・。確かに人類は滅びの時を迎えるかもしれない。今、一番力を手にしてはいけない人間がオーバーテクノロジーを手にし、救世主を得たようでその実破壊神が降臨したのだから。

「何なのよこれぇぇぇぇぇぇぇ!!」
次の日の朝早くから破壊神の咆哮が響き渡る。
「俺が聞きてぇよ・・・ また変な紹介をされてる・・・。」
ニュース、ネット、諸々のメディアで特集されているのは怪物にいじめられてへたりこむ幼女の姿がほとんどであった。ブルーの紹介はおまけ程度、レーザーと謎の敵、ゲンムに至っては丸々カットである。しかもブルーに関しては。
『成る程。つまりこの少女は敵か味方か分からないと?』
『えぇ。今の段階で判断するのは早計でしょう。笑っていてもひどく暴力的な目が気掛かりです。』
「このコメンテーターさん中々鋭い観察眼をお持ちじゃない。」
「せい!」
「たわばっ!?」
愛香の正拳突きが貴理矢に炸裂する。ブルーの評価通りの行動である。等見ていると突然涙目のレッドが大写しになり、ワイプ画面で笑顔のキャスターが映る。
『いやぁ、テイルレッドは今回も可愛らしいですねふひひ』
おい、発言に気を付けろよ偉そうな肩書きのオッサン、と総二は思った。どれもこれもチャンネルはレッドの事ばかり取り扱っている。総二が頭を悩ませていると、別ベクトルで悩ませている愛香が言う。
「あっちでもこっちでもレッドばっかり、どうして!?同じ正義の味方

なのにどうしてあたしはこんなに評判悪いのよ！テレビでもネットでも爪弾きにされてるわ！」
「ネット？お前ネットまでチェックしたのか？」
やけにでかいくまを目の下にこしらえていると思いきや徹夜ネットサーフィンの産物かと推測する。この状況でよくもまぁ自分からエゴサしようと思ったものだ。
「ネットで嫌な思いをしたから、テレビなら・・・ って思ったのよ！ネットって悪口の方が多いから仕方ないって・・・ そしたらこれよ！」
「・・・ そんなにひどいのか？テレビでも結構アレだったけど・・・。」
「ひどいんだから。掲示板でブルーを絶賛するコメを書くと音速で『自演乙』ってレスが飛んで来るのよ！」
「お前はどこの掲示板に入り浸ってるんだ。」
「仕舞いには動画サイトで私のＩＤブロック推奨って晒されたされたのよ!?酷いわよね!?」
たった一晩でどれ程の激闘を繰り広げたらそうなるのであろうか。
「いーじゃねぇーか、評価されてる分マシだろ。自分なんて見ろ。評価すら無いぞ。」
貴理矢は不貞腐れたように言う。そもそも貴理矢、レーザー単体での評価はネットにはあまり無い。精々バイク等を取り扱っているサイトからあのバイクどうなってんの？位だ。ぶっちゃけ低評価よりモヤモヤする。
「あらあら愛香さん？もしかして『私の方が可愛いのに、キー！』とか思っちゃってます？」
昨日ナフェールに巻いて貰ったコルセットも痛々しく、ナフェールに車椅子を押してもらいながら、トゥアールは邪悪な笑みを浮かべ、居間に入ってきた。ナフェールが凄い申し訳なさそうな顔をする。
「テイルブルーも人気者には間違いありませんよ、ほら。」
トゥアールは手に持ったノートＰＣのタッチパネル画面に指を走らせ、ウィンドウを表示する。
・胸がまっ平なのに胸元が空いたスーツ着るとかマゾなの？マゾの人なの？

・一瞬色っぽいと思った。違った。
・貧乳なのにセクシー衣装で顔面テイルブルーｗｗｗ
等の温かいコメントが寄せられていた。しかもスクロールしても下にたどり着かない程ぎっしりと。
「全国のどこの誰が書いたのか特定しなさい！殴り込みに行くから！」
「個人情報は保護されなければ」
「あたしの身体的悩みも保護しなさいよ！というか何であたしは変わらないのよ！巨乳になるのが前提のスーツじゃないの!?」
「おそらくテイルギアの核の力よりも、愛香さんの貧乳の属性力が勝ってるんでしょぷー、ククー」
どうやら本人が歓迎しかねる身体的特徴まで属性力と定義されるらしい。
「こっ、の・・・！」
「あ～っ！愛香さん、そうやってすぐ手を出すんですか!?危険な目つきしてるって言われたばかりなのに！」
「ぬぐぐ」
プルプルと愛香が震える。今までの鬱憤を晴らすようにトゥアールはねちねち言い始める。
「愛香さんのそういう正義っぽくないところが、世界中の人に見透かされてるんです。悔しかったらまず何かある度に人を殴る癖をどうにかしましょう。直る頃にはきっと皆さんもブルーの事を認めてくれますよレッドの引き立て役としてプププー」
よくまぁこんなすらすらと人を煽る言葉が出てくるものだ。愛香は笑顔でピースをするとその二本指を思い切りトゥアールの可愛らしい瞳に突きいれた。
「ギニャーーー!!」
「言ったそばからお前！」
「しょうがないじゃない！」
「いやしょうがなくはねぇよ!?」
暴れだす愛香を総二と貴理矢は押さえつける。果たしてホントに

大丈夫なんだろうか。ナフェールは四人のやり取りを見ながら思った。

「ぬぅ。フォクスギルディがやられたか。」
「タトルギルディに続いて三人目、ですな。」
アルティメギル達は次の刺客を送り入れるための会議を開いていた。様々な姿の怪人達が討論する。
「しかし、このテイルレッド・・・・。」
画面一杯に映し出された赤い髪の束の幼女を見ながら怪人達は呟く。
「しかし、テイルレッド。しなやかで繊細。まとめ方も洗練されている。」
「まるで芸術品のような趣のツインテールだ。」
「神が生み出した偶然としか言い様があるまい。」
「確かに。これはどう考えても・・・ 一番似合うのはスク水だな。」
「いやいやナース。」
「やはり甘ロリははぜせぬ」
等と真剣な面持ちで会話している。凄いシュールな光景である。ちなみにテイルブルーとレーザーに関しては議論の槍玉にすら上がってない。
等と議論の後、一人の犬のような見た目の戦士が立ち上がる。
「ならば次はこの我！我が行かせて貰おうか！」
「おぉ。ドーベルギルディ。指属性（フィンガー）のお前が行くか。」
「待て。」
次の刺客が決まってさぁ会議が終わるぞという流れの中で先程から一言も発さなかったドラグギルディが口を開く。
「どうされましたかドラグギルディ様？」
「・・・ 隠れても無駄だ。出てこい。」
その言葉にドラグギルディの視線の先に全員が視線を向ける。
《フッ。気づかれていたか。》

会議室の扉が開き、そこには紫色の装甲を纏った赤い瞳の黒の戦士、仮面ライダーゲンムがいた。
「貴様は!?」
「フォクスギルディの手助けをした・・・」
「いやそれよりどうやってここに入ってきた!?」
全員が身構える。敵の本拠地で見つかってしまったと言うのにゲンムは身動ぎ一つしない。
「・・・ ここの基地に来た目的はなんだ?」
ドラグギルディの問いにゲンムは答える。
《要望は一つ。〝アルティメギル〟に私を加入させて貰えないだろうか》
「何・・・ ?」
《勿論只でとは言わん。手土産もある。》
するとゲンムは掌からキューブ状の箱をを取り出すと近くのエレメリアンに投げつける。
「こ、これは!?」
「エ、属性力・・・ !?」
そう。箱にはエレメリアンにとって必要不可欠で欲してたまらない属性力が詰まっていた。それをこんな大量に。こちらは三人投入して一つも手に入らなかったのに。
《戦闘にもそれなりの自信はある。どうだ?悪くはないと思うが。》
「ふむ。」
「お、お待ち下さいドラグギルディ様!このような素性の分からぬ男、〝アルティメギル〟に参入させる訳には参りませぬ!!」
そう言うと、先程名乗りを上げたドーベルギルディがゲンムの前に立ちはだかる。
「何を考えているかは知らぬが余所者は出ていって貰おうか!」
《ふっ・・・ 丁度良い。私の実力をお見せ致しましょう。だが。》
ゲンムはドーベルギルディに指差して言う。
《貴様一人では役不足、レベル2で勝てる。そうだな・・・ 五人がかりで掛かってきてもらっても構わんぞ。》

「貴様我を愚弄する気か!!ならば身をもって思い知るが良い！」
そう言うが早いかドーベルギルディがゲンムに襲い掛かる。ドーベルギルディは大きく振りかぶってゲンムに拳を繰り出す。
《ふん。》
だがゲンムはその拳を受け流すと反撃と言わんばかりにドーベルギルディの鳩尾にカウンターの拳を叩き込む。
「がっ・・・ !?」
《フッ！》
よろめいたドーベルギルディにゲンムは追い討ちの上段回し蹴りでドーベルギルディを蹴り飛ばす。ドーベルギルディはそのまま壁に激しく打ち付けられ、気絶する。
《この程度か。拍子抜けだな。》
「ば、馬鹿な・・・ ！」
「あのドーベルギルディをたった二発で・・・ ！」
ドーベルギルディがあっさりと倒されて驚愕する一同にゲンムは手をこ招く。
《なんならここにいる全員を相手してやっても良いんだぞ。》
「貴様・・・ ！」
その言葉にエレメリアンの四人がゲンムに飛び掛かる。だがゲンムはその四人の攻撃を受け流し、時には反撃をしながら互角以上に立ち回る。
《フッ。そうだ。そうでなければコイツを試せないと言うものだ。》
ゲンムは一旦下がると腰のホルスターからガシャットを取り出し、起動させる。
『シャカリキスポーツ！』
すると軽快な音楽と共にゲンムの後ろにスクリーンが浮かび上がり、そのスクリーンから一台の自転車が現れる。
「な、なんだ・・・ ？」
《グレート3・・・》
『ガッチョーン！ガシャット！ガッチャーン！』
一旦レバーを閉め、そしてガシャットを挿しもう一度開く。

『レベルアップ！マイティジャンプ！マイティキック！マ～イティ～アクショ～ンX！アガッチャ！シャカリキシャカリキ！バッドバッド！シャカっとリキッとシャカリキスポーツ！』
次の瞬間自転車、シャカリキゲーマーが変形し、ゲンムの上半身を覆うように装着される。さらにゲンムの頭部にはスポーツヘルメットのような装甲も追加される。
《仮面ライダーゲンムレベル3・・・ スポーツアクションゲーマー・・・》
「なんだコイツ・・・ ！」
「自転車を・・・ ？」
「どうせこけおどしだ！」
襲い掛かるエレメリアンに対し、ゲンムは右肩の車輪、トリックフライホイールを投げつける。トリックフライホイールは一人でに紫色のエフェクトを放ち、回転しながら襲い掛かるエレメリアン達を追尾し、ぶつかっていく。
「ぐあっ!?」
「うおっ!?」
「ぐあぁ!?」
「な、なんだ」
《どこを見ている。》
『チュ ドーン！』
「ぐわぁ!?」
仲間を襲うトリックフライホイールに気を取られたエレメリアンをゲンムは右腕のユニット、ガシャコンバグヴァイザー、ビームモードで狙い撃った。
《・・・ さて。まだやるか？》
ゲンムが他のエレメリアンに振り返るとドラグギルディが答えた。
「いや、お主の実力は良く分かった。我が加入を認めよう。」
《ほう。》
「だがしかし。我らに仇なる行為を取ればどうなるか、分かっていような？」
眼力だけでこの威圧。対象ではないエレメリアン達も肝を冷す中

睨まれたゲンムは飄々としたまま答えた。
《勿論。分かっているとも。》
ゲンムの赤い瞳が妖しく輝いた。

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　Ｎｅｘｔ　Ｇａｍｅ……

俺、決意を新たにします／史上最大のＩｎｖａｄｅ

「何なのよアイツ!!」
　登校への道のりで愛香がぷりぷりと怒りながら文句を垂れる。その様子を総二と貴理矢が苦笑いを浮かべながら見守る。
　あの後、実は愛香ことテイルブルーをおちょくっていたコメの大半を投稿していたのがトゥアールであった事が発覚し、愛香の暴力がまたもやトゥアールに炸裂したのだ。
「いっつもいっつも私をおちょくって！何が私の事を親友と思っているよ！」
「うーん、それはホントと思うぜ？」
　怒る愛香に貴理矢が訂正を入れる。
「はぁ？どこがよ？」
「貴理矢の言う通りだよ。なんだかんだでトゥアールと愛香は仲良いし。」
「・・・・ふん。どーかしら。」
　ツンと愛香はそっぽを向く。けれども満更では無い様子に総二と貴理矢はヤレヤレと肩を竦める。
「・・・にしてもアレだな。最近、増えたよな。」
「何が？」
「いや、ツインテール。」
　貴理矢がクイと顎で指す先には髪をツインテールに纏めた少女達がいた。すると総二が目をキラキラさせて貴理矢に言う。
「・・・貴理矢。それに気づくなんてとうとう貴理矢も俺と同じ」
「いや、自分髪型はセミロングのボブカット派だから。」
「貴理矢の裏切り者！」
　総二はワッと貴理矢を怒る。貴理矢はいつもの事だと笑って受け流す。
「・・・それにしても確かに増えてきてるわね。結構ヤバいかも・・・。」
　ブツブツ何かを小声で呟く愛香に貴理矢はニヤニヤしながら言う。
「大変だねぇ。愛しの総二がフラフラしちゃいそうだもんな。」

「な、そ、そんなんじゃ無いわよ！」
「？」
　愛香が顔を赤くし、総二は頭に？マークを浮かべつつも三人が話しながら校門をくぐると偉く上機嫌な金髪ツインテールの少女、神堂慧理那生徒会長が三人に話し掛けてくる。
「あら、皆さんおはようございます！」
「あ、お、おはようございまひゅ！」
「おいおい。総二。テンパり過ぎだぜ？」
　ぐぬぬ・・・ と愛香が憧れの神堂会長に話し掛けられてドギマギする総二を睨む中、貴理矢が神堂会長に話しかける。
「それにしても偉く上機嫌に見えますケド、何か嬉しい事でもあったんスか？」
「ええ。テイルレッドにレーザー以外にもテイルブルーという同世代の頼もしい味方がいたことが私嬉しくて・・・。」
「！」
　初めて出会うテイルブルーを良く言ってくれる人にピクリと愛香が反応する。
「やっぱり、テイルレッドも同じ女性の仲間がいると心強いと思うんです。どんなに強くても一人で戦い続けるのは辛いと思いますから・・・。だから、レーザーの他にもテイルブルーという味方がいて、私安心したんです。」
　ここまで、テイルレッドの事を考えていてくれたなんて・・・。総二の胸に熱い物が込み上げてくる。愛香も嬉しそうだし、貴理矢も笑みを浮かべている。
「・・・ 私、この年でもヒーローモノが好きで、よく見るんです。まえにあの怪物に襲われた時もこっそりデパートでやっていたヒーローショーを見ようとしたんですよね。やっぱり・・・ この歳でヒーローモノ好きはおかしいですかね？」
「そんな事はないですよ会長！」
　総二が神堂会長に言う。
「貴女のその思いやる気持ちはテイルレッドも嬉しいと思います！多

分…　いや、絶対!!」
「…　そうですか。」
　クスリと神堂会長は笑い、そして三人に尋ねる。
「そう言って貰えると私も嬉しいです。お名前をお聞きしても？」
「観束総二です！」
「…　津辺愛香です。」
「三条貴理矢でーす。」
「…　覚えました！では観束さん、津辺さん、三条さん、よき学園生活を！」
　そう言って神堂会長は去っていく。その後ろ姿を見ながら貴理矢は愛香に言う。
「良かったじゃねーか。テイルブルーを評価してくれる人がいてよ。」
「…　まぁね。」
「やっぱり会長はいい人だ…。あんなにテイルレッドや、ブルーとレーザーの事思ってくれるなんて。」
「何言ってんだ。あっこにもテイルレッドの事思ってくれる人いるぞ。」
　貴理矢が指差す先に総二が視線を移す。そこには同じクラスの男子生徒達がいた。
「トランクスにテイルレッドたんをプリントしてきたぜ！もはや常に一緒にいないと作業もままならねぇ!!」
「お前！テイルレッドたんｂｏｔパクってんじゃねーよ！俺が先に作ったんだぞ！」
「うるせー！俺の方がフォロワー数多いんだぞ！って言うか既にｂｏｔは何千何百と作られてんだから今更だろ！」
「うん。うん。放課後一緒に映画見に行こうねテイルレッドたん。」↑通話が繋がっていない電話に話しかけてる。
　思わぬどす黒い深淵がごとき闇を目の当たりにして総二は愛香にげんなりとした様子で言う。
「…　嫌味でも何でもないが、愛香。代われるもんなら俺は代わりたい。いやマジで。」

「…ごめん。アタシも少し頭冷やすわ。」
「…何かゴメン。」

「…昨日までの時点で倒された同胞は隊員十六名、戦闘員百二名に上ります。」
「ふむ…。」
「これほどかツインテイルズ！」
アルティメギル前線基地のホール内で作戦会議が行われていた。
テイルレッドだけでもかなりの脅威であるにも関わらず、さらに追加戦士として新たに参戦したテイルブルーとサポートのレーザーによってこの一ヶ月の間でかなりの損害がアルティメギル側に出ていた。
「この際、属性力の持ち主もろとも捕らえて即座に引き上げれば良いではないか？」
「馬鹿な！それでは我々が奴らを恐れて逃げているようではないか!!」
安全策を出すエレメリアンにドンと机を叩いて他のエレメリアンが抗議する。属性力が無くては生きては行けぬ身、アルティメギル側にも徐々に焦りが見えてきていた。
《やれやれ。何やら手こずっているようだな。》
「貴様…！」
ゲンムがため息混じりに発言すると全員の敵意の視線がゲンムに殺到する。だがゲンムは全く意に介さずエレメリアン達を見据える。
《何か言いたい事でも？》
「貴様一ヶ月も研究室に籠っていた分際で！」
「左様！少しばかり腕が立つからと言って調子に乗るのは止めてもらおうか！」
《やれやれ。嫌われたモノだな。》
今にもゲンムとエレメリアン達が一触即発な雰囲気になりつつあ

るその時だった。
「えぇい静まれィ！」
　その鋭い一喝に会議室がビリビリと震え、全てのエレメリアン達がシンと静まり返る。
「ど、ドラグギルディ様・・・・」
「生半可な戦士をぶつけるのはもはや徒に戦力を削るだけ。これより先は選ばれし者のみに許された聖戦である。我こそはと志願する者はおるか!!」
「ハッ！ならば僭越ながら私めが！」
　ドラグギルディの声に反応したのは、野心や計算なしの危ういまでに実直な威勢の良い声。ドラグギルディが最も好む声である。その声の主は白鳥のような姿の戦士。スワンギルディだった。
「お、おう看護婦属性（ナース）の申し子と呼ばれし神童スワンギルディか！」
「お主なら何の問題もあるまい！」
　ドラグギルディの一声に肝を冷やしていたエレメリアン達から安堵の声が上がる。ゲンムは特に反応せずに一人の戦士を見つめる。
（・・・　ふん。）
　ドラグギルディはゲンムを一瞥すると立ち上がり、スワンギルディの前に立つ。
「よかろう。だがその前にツインテイルズと戦う資格があるかテストを行う。」
　次の瞬間目にも止まらぬ速さで抜かれたドラグギルディの剣がスワンギルディの目前の数ミリで止まる。だがスワンギルディは少しも動じることはなかった。
「ふん。多少肝は座っているようだな。次だ、アレを持ってこさせい!!」
　するとホールに戦闘員が一台のパソコンを持って入室してくる。そのパソコンを見た瞬間スワンギルディの顔色が代わる。
「そ、それは私のパソコン!?な、何故ここに!?」
《？》

さっきまでドラグギルディの一閃にすら驚かなかったスワンギルディに焦りの色が見え、ゲンムは何が起きるのか興味を持つ。それほどまでにあのパソコンには何か秘密があるのであろうか。ドラグギルディはスワンギルディのパソコンの電源を入れ、会議室用の大型モニターと画面をリンクさせる。
「それでは試練を始めようか。」
「ま、まさかあのエロゲ・ミラレイターを・・・!?」
その言葉に会議室全体の雰囲気がかなり重くなる。まるでこれから起こる悲劇を全員知っているかのようだ。
カチカチとパソコンをいじる音が聞こえ、その度にスワンギルディの肩が震える。そしてローディング画面の後、モニターに映像が浮かび上がる。
『いけない!ナースエンジェル〜!』
《・・・は?》
「ヒィッ!?」
ゲンムは困惑する。何やら恐ろしい事が始まるかと思いきや浮かび上がったのはまさかのエロゲのタイトル画面だった。だが呆けるゲンムとは対照的にスワンギルディは悲鳴を上げる。操作を続けながらドラグギルディはパソコンの操作を続ける。
「クックックッ。これはつい先日発売されたモノではないか。それなのにもうコンプリートとは。卑しい者よのぅ。」
「み、見るだけで恐ろしい!」
「公開処刑だ・・・」
《え。何言っているんだコイツ等・・・?》
周りの空気についていけないゲンムを置き去りに、地獄が展開されていく。ドラグギルディがセーブファイルを開き、色々と閲覧していく。その中のえらく肌色が目立つサムネイルのファイルに目を止める。
「ふむぅ。これとか怪しいのぅ。」
「お許しを!それだけはお許しを!!」
必死に赦しを乞うスワンギルディ。だが現実は残酷。無情にも

ファイルをロードされる。
　おそらく主人公の部屋でのやり取り。ヒロインが頬を赤らめ、段々良い雰囲気になるものの、特に何事もなく次の日へ。
「クックックッ。ヒロインが主人公の部屋に来て空気が変わった所ですかさずセーブをしたな？これから二人で睦事をするのではないかと。しかし期待とは裏腹に何事もなく日付ロゴが代わり、落胆ー」
「あるある」
「うっぎぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
《えぇ・・・。》
　ゲンムには全く理解出来なかったが、周りのエレメリアン達は何やら納得し、スワンギルディは悲鳴を上げ泡を吹いてバタンとぶっ倒れる。ぶっ倒れたスワンギルディを一瞥してドラグギルディは指示を出す。
「ふん。情けない奴よ・・・　小奴を医務室に連れて行け！この程度耐えられれん等笑止千万！我が出る！」
　ドラグギルディ自らの出撃宣言に会議室がざわつく。
「ドラグギルディ様自ら?!」
「何もドラグギルディ様自ら行かなくとも」
「くどい!!」
　抗議の声もドラグギルディの一喝が黙殺させる。ドラグギルディはゲンムに視線を向け言う。
「貴様にも出撃してもらうぞ。」
《・・・　私もか。だが出撃後は私の好きにさせて貰うぞ。》
　ゲンムがゆらりと立ち上がり、傲岸不遜の態度でドラグギルディに言い放つ。
「貴様ドラグギルディ様に向かっ」
「良い。貴様の好きにするが良い。」
　激昂する部下をドラグギルディが諌める。ゲンムは振り返りもせず会議室を後にする。
「ドラグギルディ様・・・　！」
「心配無用。奴が何を企んでいようと。」

ドラグギルディも力強く一歩前に踏み出しエレメリアン達に告げる。
「ツインテイルズは我が倒す。」
「お、今日はナフェール一人？」
「ええ。そう言う貴理矢さんも一人ですか？」
「まぁね。」
トゥアールとナフェールが作った地下基地のナフェールの部屋に貴理矢はいた。清潔さを感じさせる青を基調とした部屋で作業に打ち込むナフェールに貴理矢は話し掛ける。
「なーに作ってんの？」
「今までのレーザー、貴理矢さんの戦闘データを元にレベル３用のプロトガシャットがもう少しで完成するんです。」
「へぇー！レベル３ねぇ。次は何になるんだ？」
貴理矢が尋ねるとナフェールは少し悪戯っぽく笑みを浮かべて言う。
「フフッ。秘密です。最近はエレメリアンもそこまで強くはありませんし。」
「んだよー。教えてくれても良いじゃない。・・・ でも確かに最近のエレメリアンはなんつーか・・・ 弱いな。だって現に自分、出なくても良いし。」
貴理矢が言う通り、ここ数日現れたエレメリアンは控えめに言っても下手打つとレーザー一人でも対処出来る程の実力で、レーザーは万が一に備えて待機とは言うものの、実質レッドとブルーだけで事足りると言うのが現状だった。しかし、貴理矢には一つ気掛かりになる事があった。
「・・・ 自分としちゃああのゲンムとか言う奴が一番気になるんだがな。」
「・・・ はい。」
貴理矢がゲンムと言う言葉を出すと、ナフェールは俯く。フォクスギルディ戦以降ゲンムが介入すると思い身構えていたが、ここ一ヶ月

全くゲンムは現れず姿を見せない。同じゲーマドライバーを使い、ガシャットで同じく変身する仮面ライダー。ゲンムの正体はナフェールも知らないし、何故ゲーマードライバーを所持しているのかも不明な謎に満ちた敵だ。ただ一つ分かるのはかなりの強敵と言うことだけだ。

「一体何なんだろうなアイツ？」

「・・・・ 今は分かりません。けどゲンムに対抗するには」

ナフェールがそう言いかけた瞬間、警報が鳴り響く。

「何だ!?」

「トゥアール!? 一体何が」

『町にあの例の黒い奴、ゲンムが現れたんです！』

「何!?」

トゥアールの報告にナフェールが慌ててモニターを操作する。そこに映し出された映像にはゲンムが町で大暴れしている映像だった。ゲンムの回りには七面鳥のような頭部をした黒い戦闘員があちこちで人々に襲い掛かっている。

今までのエレメリアン達は人は襲えど町を破壊する、人間を肉体的に傷付けるといった行為は最小限に留めていたが、ゲンムは意に介さず暴れまわっている。

「あの野郎・・・・ !!」

貴理矢は腰にゲーマードライバーを巻き、ガシャットを差し込んで出撃するためのゲートへと急ぐ。

「ツインテイルズのお二方は!?」

『すみません！こちらも新たなエレメリアン・・・ ドラグギルディと交戦中で手が回せません！』

ドラグギルディ・・・・ トゥアールのその言葉にナフェールの目が見開かれ、ナフェールは言葉を失う。とうとうやって来たのだ。奴が。自分達の世界を破壊した最強最悪の強敵が。

ナフェールは絶望的な戦いが幕を開けた様に思えた。

Ｓｅｅ ｙｏｕ Ｎｅｘｔ Ｇａｍｅ・・・・

俺、決戦です／Ｓｏｍｅ　Ｌｉｅの極意！

「・・・・くっ!!」
「・・・スマンな。お主ほどの腕ならこれくらいあっさり避けると思うておってな。」
　エレメリアンを倒し、帰ろうとしたテイルレッドの前に体長三メートルはあろうかと言う全身傷だらけの屈強な龍のごときエレメリアンが立ちはだかっていた。不意討ちとは言え先程の鋭い一撃、そして全身からみなぎるオーラ。眼前のエレメリアンの全てからテイルレッドは感じとる。今までのエレメリアン達とは一線を画すかなりの強敵であると。
「我が名はドラグギルディ！全宇宙全世界においてツインテールを愛する事において右に出る者はいないと自負する者よ!!」
「コイツ・・・！ノリはいつもと一緒か！」
　テイルレッドも剣を構え直す。ドラグギルディはふと先程までテイルレッドと戦い敗れた部下が消えた場所を見つめる。
「・・・馬鹿者が。我が出向くと言ったものを・・・。」
　だがそれも一瞬。直ぐ様ドラグギルディも剣を構えテイルレッドを見据え、傲岸不遜に言い放つ。
「不甲斐ない部下が退屈させた！だが部下は部下！仇は取らせて貰う！」
「勝手に侵略してきて何が仇だ！」
　気合い一閃。襲い掛かるドラグギルディをテイルレッドが真正面から迎え撃つ。激闘の火蓋が切って落とされた。

《さぁ。出てこい仮面ライダーレーザー。あまり私を焦らすなよ・・・。》
　あちこちから火の手が上がる町を悠然と歩きながらゲンムは呟く。恐らくツインテイルズはあのドラグギルディが一人で押さえるだろう。ならば自分はレーザー一人に集中すれば良い。

今までのエレメリアン達が興味外の一般人を襲わなかったのが災いして、襲われないと思い込んでいた一般人の初期対応が遅れ、逃げ遅れた人々があちらこちらにいる。それをわざと煽るよう尖兵である下級バグスターに襲わせる。警官が駆けつけて応戦したが、ゲンムと下級バグスターの敵では無く瞬く間に蹴散らされる。
「痛ッ！」
「お姉ちゃん！」
不幸にもバグスターの眼前でこけてしまった姉弟にバグスターの凶刃が襲い掛かる。姉が健気にも弟を庇おうとした瞬間だった。
どこからともなく飛んできた弾丸がバグスターを吹き飛ばす。
「え…」
《ようやく来たか。》
見ればバグスター達が一人の戦士の手によってみるみるうちに蹴散らされていく。フロントアームドユニットで殴り付け、ドロップキックをかましながらバグスター達を吹き飛ばす。
「大丈夫かあんた達！ここは自分に任せてさっさと行った行った！」
「は、はい！ありがとうございます！」
仮面ライダーレーザーレベル1が姉弟達を逃がす。そしてレーザーとゲンムが互いに向かい合う。
「…　無関係の一般人まで襲うたぁ随分と悪乗りが過ぎるんじゃねーかゲンムさんよ。」
《私は奴等とは違う。貴様を誘きだすのに最善手を打たせて貰っただけだ。》
「は。なんとまぁ随分と腐った野郎だぜ！」
《抜かせ。》
『ギュ　イーン！』
次の瞬間ゲンムはガシャコンバグヴァイザーをチェンソーモードに変形させレーザーに襲い掛かり、レーザーとそれをフロントアームドユニットとリアアームドユニットで迎え撃つ。こちらでも戦いの火蓋が切って落とされた。

「ぐぅ！このぉ！」
「力任せに受けて刃こぼれ一つせんとは随分と立派な装備だ！だが。」
ドラグギルディの無数に見える刃を何とか受け止め、反撃とテイルレッドが剣を振るうが、ドラグギルディはこれをあっさりと剣の腹で受け止める。
「じゃれているのかテイルレッド？こそばゆいわ！」
ドラグギルディはそのまま剣を振り抜きテイルレッドを吹き飛ばす。テイルレッドは何とか空中でバランスを取り、地面に線を引きながら着地する。
「コイツ・・・ やっぱり強い！」
「まだまだ行くぞ！」
ドラグギルディは一気にテイルレッドとの距離を詰め再び息をもつかせぬ連撃をテイルレッドに浴びせる。
流れる滝のような激しい斬撃がテイルレッドを徐々に追い詰める。一閃一閃が流れるように美しく激しい。
「ぐっ・・・・ はっ！これは・・・・。」
追い詰められる中、レッドの目が見開かれる。レッドの目に流れるような斬撃の軌跡が映り、ある一つの答えを導きだす。次の瞬間レッドの動きが変わる。怒涛の攻撃を見る見る内に見切り、そして受け止めていく。
「ふっ、気づいたかテイルレッド！」
「せいっ！」
レッドのカウンター気味に放った横一閃の斬撃をドラグギルディは後ろへと跳ぶ事でかわす。レッドは先程とは打って変わり、その顔に笑みを浮かべる。
「・・・ ドラグギルディ、その斬撃。」
「その通りだテイルレッド。我が斬撃は」
「ツインテールの剣!!」
「ぶっ!?」
テイルレッドとドラグギルディの声がハモり、つい先程援軍として

到着した愛香ことテイルブルーがそれを聞いてこける。そしてブルーは半眼のままぼそりと呟く。
「あー、成る程。今回の敵はそーじ系ね・・・。」
「あれ？ブルーいつの間に？というかそーじ系って何？」

一方レーザーとゲンムは街中で激しい戦闘を繰り広げていた。レベル差があるものの、レーザーもただただ一ヶ月を無為に過ごしてきた訳ではない。来るべきゲンムとの戦いに備えてある程度トレーニングはしていたのだ。ゲンムの攻撃を的確に受け止め、そして確実に反撃していく。
「オラッ！どうだ！」
《チッ。身持ちが固いことだな。》
「お褒めに預りどうも！」
何も焦る事はない。耐えて耐えて一撃一撃を確実に当てていく。幸い性能差は絶望的と言うほどでもない。レーザーはゲンムの一撃を上段に振りかぶった一撃を受け止めると、そのまま反撃にドロップキックをお見舞いする。
《チィッ！》
『チュ　ドーン！』
ゲンムは後ずさりながらもバグヴァイザーをビームモードに変え、ビームを撒き散らす。
「うおっと！」
レーザーは慌てて近くの建物の陰に隠れる。建物の壁をビームが抉るがレーザーに損傷は無い。
《姑息な真似を・・・》
「悪いね。縛りプレイは慎重にやる派なんでね！」
建物の陰からフロントアームドユニットの弾丸を放つ。ゲンムの周辺の地面が爆ぜ、思わずゲンムも後ろへと後退する。
「どうだい？降参したらどうだ？その方がお互い楽だろ？」
《随分と余裕だな。》
レーザーの降伏勧告にゲンムはヤレヤレと肩を竦める。そしてバ

グヴァイザーを下ろすと、腰のホルスターから新しいガシャットを取り出し、起動させる。
『シャカリキスポーツ！』
「？新しいガシャット？」
《その余裕の発言はコイツを見ても言えるかな？グレード３・・・・》
『ガッチョーン！ガシャット！ガッチャーン！レベルアップ！』
　ゲンムはシャカリキスポーツガシャットをゲーマードライバーの空きスロットに挿し、シャカリキスポーツゲーマーをその身に纏う。
『シャカリキ！シャカリキ！バッド！バッド！シャカっと！リキっと！シャカリキスポーツ！』
《ふん！》
　仮面ライダーゲンムレベル３は右肩のトリックフライホイールを取り外すとレーザーの方へ投げつける。
「何の！」
　迫り来るトリックフライホイールを撃ち落とそうとレーザーは両アームドユニットの弾丸を発射するが高速回転し、不規則な軌道を描くトリックフライホイールを撃ち落とすは至難の技だった。トリックフライホイールはレーザーの放った弾丸を掻い潜り、レーザーに直撃する。
「いでっ!?」
　今までの攻撃の中で最大の衝撃がレーザーを襲う。堪らずレーザーは吹っ飛ばされて建物の陰から飛び出てしまう。
《捉えたぞ!!》
「なっ、ぐおっ!?」
　いつの間にか距離を詰めていたゲンムが間髪入れずに跳び膝蹴りをレーザーの胸元にめり込ませる。再びレーザーは吹っ飛ばされて地面を転がる。
《まだまだ眠るには早いぞ。》
　トリックフライホイールをキャッチしたゲンムが追撃に走る。ゲンムの猛追が始まる。

ドラグギルディとテイルレッドが激しく打ち合う。最初は思わぬ強敵に圧されていたレッドであったが、援軍の到着とドラグギルディの剣の軌跡を見切ったことにより徐々に態勢を持ち直し、ドラグギルディの剣撃を受けながらも逆に攻めに転じて剣を振るう。幾閃打ち合ったかもはや数えきれぬ程剣を振るった後、互いに切り払って距離を取る。

「ふふっ・・・ 見事・・・ ！見事なりテイルレッド！敵として出会ったのが口惜しい程にな！」

「へ・・・ 剣を通して分かる。お前が心の底からツインテールを愛している事が！お前が生粋のツインテール属性なんだって事がな！」

「左様！ツインテール属性は引かれ合うのだ！」

「いや、それただの類友でしょ。」

熱く語り合う変態達にブルーのツッコミが入る。ドラグギルディはふとテイルブルーに視線を向けしげしげと観察する。

「な・・・ 何よ。」

「何、初めて映像を見た時から気になってはおったが、成る程そう言う事か。あの戦士の差し金か。」

「あの戦士？」

ブルーが疑問を口に出すとドラグギルディは思ったのと違う反応に一瞬疑問符を浮かべるがすぐに納得して語りだす。

「何だ、知らなかったのか？かつて我が好敵手と呼ぶに相応しい凄まじき戦士が同じ衣を纏っておったのだ。まぁツインテールに似合わぬ下品な乳をしていたのでお主を見ても結びつかなんだわ。」

「・・・ もしかして。」

レッドが声を上げる。レッドの脳裏に浮かぶのは異世界から来た二人の来訪者。そしてドラグギルディは二人に語り始める。

これまで数々の刺客を送り込み、その悉くが破れ去ったのも計画の内。そして堂々とした征服宣言も自分達ではなくこの世界の守護神たるツインテイルズを祭り上げ、世界中に認知させるためのアプローチ。異世界から迫り来る外敵を可憐な少女が打ち倒す。そしてその

少女に集まる羨望、憧れ、興味、期待。ツインテール属性が世界中に爆発的に広まっていく。要するに今までの戦いは世界中にツインテール属性を広めるための三文芝居。それはまさしくツインテール属性を理想的に刈るための人間牧場を作るための狡猾な作戦だった。
「勝ってくれるならそれで良かった。愛する我が部下達だ。だが組織である以上効率的なやり方を知ればそれをやらざるを得ない。」
「・・・ 成る程ね。」
「ほう。思ったより落ち着いてるなテイルブルー。」
「何となく予想ついてたし。」
　あの時、トゥアールがはぐらかしたのはこういう事だったのだ。自分達の世界が破壊されたからヤケになったのだ。騙された。そうブルーは感じた。アイツらは最初から嘘をついていたのだ。
　レッドは俯いて話を聞いていたが、しばらくして口を開く。
「・・・ 何でそんな事今言うんだよ？」
「せめてもの手向けだ。全てを知った後絶望せぬようにな・・・。」
　レッドはしばらく俯いていた。ドラグギルディはレッドの心が折れたのだと確信した。自分達がやっていたことは全て徒労だったのだと思い知らされたのだから。レッドが顔を上げる。

　その表情に大胆不敵な笑みを浮かべながら。

「なっ」
「感謝するぜドラグギルディ。手向けなんかじゃねえ。俺にとっちゃ嬉しい朗報だぜ？お前らが一斉に刈ろうとするってのはつまり一時期のブームなんかじゃない。ツインテールが皆に根付くって事だ。」
　レッドは剣の切っ先をドラグギルディに向け、自信満々に叫んだ。
「つまり俺達がテメェ等に負けなきゃ良いってだけの話だ!!」
「何と・・・」
「・・・ 何よ。心配したアタシが馬鹿みたいじゃない。」

ブルーはレッドを見つめ、肩を下ろす。そうだ。コイツはそう言う奴だ。長年一緒にいたのだから分かりきっていたのに。
「世界の終末を前にその大見栄を切る度胸、尚揺るがぬ不動の心。テイルレッド。感服したぞ。」
ドラグギルディが再び剣を構え、レッドもドラグギルディを見据える。レッドが啖呵を切る。
「さぁて！ここから俺達の」
「ワーハッハッハッハッハッ!!そこまでですドラグギルディ!!」
「タイミングゥゥゥゥゥゥ!!!!」
空気を読まない横槍にレッドが叫ぶ。一世一代の大見栄が潰されたのだから致し方無いと言えば無いのだが。
「何奴!?」
声がする方を見ればそこには仮面被った白衣の少女がいた。ぶっちゃけ仮面被ったトゥアールだった。
「私は・・・ 仮面ツインテール!!」
「「ぶっーーー!?」」
名を尋ねられたトゥアールが腕を組んで直立不動で堂々と宣言する。と言うか仮面ツインテールて。もっと良い名前あったろうに。
「確かに。私と彼女が制作したブレスとドライバーは何者かによる技術流失から転用して私が作り上げた物です。そう、それが敵からわざと流された物とも知らず。」
「え・・・。」
仮面ツインテールのその言葉にレッドは声を上げる。彼女の言葉はどこか自嘲をしているような声音だ。
「！貴様あの世界の戦士か！だが何故だ!?貴様からはあの輝き、弾けんばかりのツインテール属性を感じぬ!?我らがついぞ奪えなかったと言うのに！」
これ等の言葉のやり取りだけで正体を見破る洞察力は流石幹部エレメリアンだけはあるか。ドラグギルディの指摘に仮面ツインテールは答える。
「それは、託したからです。」

「何ィ!?」
「え!?」
「何ですって!?」
　衝撃の告白にさしものブルーも驚愕の声が出る。当時のトゥアールも薄々エレメリアン達の計画には勘づいていたのだが、自分を慕う幼女を裏切る真似は出来ず二の足を踏んでしまい、その心の隙を突かれ、ドラグギルディに敗北したのだ。それから基地に籠って作戦を練り、ナフェールのゲーマドライバーの完成を待ったが時既に遅し。エレメリアンによってトゥアールの世界の全ての属性力は消え去ってしまったのだ。そのケジメとしてトゥアールは自身の属性力をブレスに譲渡し、世界を渡ったのだ。
「・・・・ 成る程。良き仲間を持ったなテイルレッド。」
「・・・ あぁ。」
　即答しようとしたらそういや夜這いかけられたり、発言が色々アレな事を思い出し、一瞬答えに詰まるもののレッドは肯定した。
『す、スミマセン!お取り込み中ですか?』
「ナフェール?」
　唐突にナフェールから通信が入る。その声は上擦り焦りを感じている事が容易に分かる。
「どうしたんですか?」
『そ、それが。き・・・ レーザーが大ピ』
『いやー、何でも無いぜ!俺は大丈夫だか・・・ うおっ!』
　ナフェールの通信を遮るように貴理矢の声がする。しかし直後に打撃音が響き、貴理矢の声が詰まる。
「お、おい本当に」
『テイルレッド。ブルー。』
　心配する二人に貴理矢の凛として堂々した声が聞こえてきた。
『心配すんな。今日の俺に嘘はない。』
「・・・・ 分かった。」
　それは意地の言葉であることがレッドには分かった。だからこそ。信じることにした。友の言葉を。

「闘志の輝きは些かも衰えてはおらぬが！我とてハナからこのような御託だけでどうにかなるとは思っておらぬわ！だが、いかなる輝きでも覆らぬ闇もある!!」
　ドラグギルディの号令と共にまるで黒い波のような戦闘員の大群が現れる。
「本気で行くぞ!!」
　次の瞬間ドラグギルディはそれはそれは見事なツインテールを頭部から生やしレッドと対峙する。威風堂々としたツインテールにレッドもたじろぐがすぐに気合いを入れ直し、ブルーに言う。
「ブルー！俺はアイツに集中する！任せても良いか！」
「良いけど、アタシの方が楽じゃないかしら？」
　二人は互いの得物を構え、各々の標的に向かって突っ込む。最終ラウンドが幕を開ける。

　爆発が起こり、レーザーは吹き飛んで近くのカフェのテラスの椅子や机を薙ぎ倒しながら転がる。
「ぐっ！」
《援軍を呼ばないとは随分と余裕があるじゃないか。》
　向こうから煙を引き裂いて悠々とゲンムが歩いてくる。
「はっ・・・　テメェなんぞアイツらが相手するまでもねぇ俺一人で充分だ！」
　レーザーが弾幕を張るが、ゲンムはトリックフライホイールを盾にしてその一撃を防ぐ。
《そろそろ消えろ。》
『ガシャット！キメワザ！』
　ゲンムは腰のキメワザスロットにガシャットを差し込む。すると緑と紫の刺々しいエフェクトがトリックフライホイールから溢れる。
『ＳＨＡＫＡＲＩＫＩ！ＣＲＩＴＩＣＡＬ　ＳＴＲＩＫＥ！』
　ゲンムがエネルギーを纏ったトリックフライホイールをレーザーに投げつける。それは不規則な軌道を描いてレーザーに一回直撃し

た後さらに追撃でもう一回レーザーに炸裂し、大爆発が起こる。
「ぐあああああ!!」
レーザーは大きく吹き飛び、瓦礫と共に地面を転がる。胸のライダーゲージが減少し、危険を知らせるアラートが響く。レーザーは仰向けに転がって薄れゆく意識の中、大きく深呼吸をしてナフェールに話し掛ける。
「なぁ、ナフェールちゃん。」
『貴理矢様!?大丈夫ですか!?』
「ちょっとキツいかも。それよりも。」
心配する声を余所に貴理矢はいきなり切り込んでいく。
「ホントは出来てるんでしょ?レベル3のガシャット。」
貴理矢の指摘にナフェールが息を飲むが聞こえた。
『そ、いや、あの』
「多分だけど、アレでしょ?実戦では使えるけど副作用がアレな感じみたいな?」
『・・・・!!・・・・はい。その通りです。プロトガシャットは出力が増す分セーフティが機能していないので・・・』
「ナフェールちゃんがそう言うって事は・・・相当キツいんだろうなぁ・・・・副作用。」
貴理矢がぼやくように言うと、ナフェールは一瞬迷った後、苦し気に言う。
『・・・はい。ですからここは一旦退い』
「渡して貰えない?そのプロトガシャット。」
『・・・・え?』
貴理矢の言葉にナフェールは一瞬何を言っているのか分からなくなる。だがすぐにそれを理解して貴理矢に注意する。
『な、何を言っているんですか!?プロトガシャットには副作用が・・・!』
「それでも。」
レーザーは震える足腰をグッと堪えて立ち上がる。既に満身創痍。このまま戦っても勝機は薄い。頼みの綱のプロトガシャットは強烈

な副作用を持つギャンブル。もはや一か八かの状況であるにも関わらず、レーザーは諦めない。
「アイツらに任せろと言った手前、キッチリやんねぇと〝ウソつき〟になっちまうからな。」
『・・・ 分かりました。ですが危険と判断したら直ぐに回収しますからね。』
「ノリがいいね。そうこなくちゃ。」
ナフェールは手元にあるガシャットを祈るように握り締め、レーザーに転送する。そしてレーザーの手元に黒いガシャットが現れる。
《まだ生きていたのか。しぶとい奴だ。》
瓦礫を蹴っ飛ばしてゲンムが歩いてくる。余裕綽々のゲンムにレーザーは思わず笑みを溢す。見てろ。今にその自慢の面を歪ませてやるぜ。
「悪ィけど・・・ ここから第2ラウンドだぜ！」
『ギリギリチャンバラ！』
ガシャットを起動させる。レーザーの後ろにスクリーンが浮かび上がり、スクリーンからプロトチャンバラゲーマーが現れる。
《新しいガシャットだと!?》
「三速！」
『ガシャット！ガッチョーン！ガッチャーン！レベルアップ！』
空きスロットにプロトギリギリチャンバラガシャットを突き挿し、レバーを開く。
『爆走！激走！独走！暴走！爆走バイク！アガッチャ！ギリ！ギリ！バリ！バリ！チャンバラ～！』
次の瞬間レーザーのレベル1装甲が吹き飛びレベル2の素体にプロトチャンバラゲーマーの手足が接続され、最後に顔に兜が装着される。そしてシュタッと二本足で地面に降り立つ。
「ふぅー、ようやく人型になれたぜ。」
《貴様もレベル3に到達しただと!?》
「ノリノリで行くぜ～！」
『ガシャコンスパロー！』

仮面ライダーレーザーレベル3チャンバラバイクゲーマーは黒い弓形の武器、ガシャコンスパローを取り出す。
『ス　パーン！』
そしてボタンを押してガシャコンスパローを二つに割って鎌モードに変形させ、ゲンムに飛び掛かる。
ゲンムもトリックフライホイールで応戦する。しかし両手武器であるスパローの手数でゲンムを押していく。
《ぐっ。》
「そこぉ！」
レーザーの猛攻に一瞬態勢を崩したゲンムにレーザーの回し蹴りが炸裂する。さらに大きく態勢を崩したゲンムをヤクザキックで思い切り蹴り飛ばす。
《ぐっ!?この出力は!?》
「結構しんどいからさ、一気に決めさせて貰うぜ！」
『ガシャット！キメワザ！』
ガシャコンスパローのキメワザスロットホルダーにレーザーはプロトチャンバラガシャットを差し込む。
『ＧＩＲＩＧＩＲＩ！ＣＲＩＴＩＣＡＬ　ＦＩＮＩＳＨ！』
「でやぁー!!」
エネルギーを纏ったガシャコンスパローでゲンムをすれ違い様に切りつける。その直後爆発が起き、ゲンムは吹き飛ばされて地面に叩きつけられる。
《ぐっ、まさかここまでやるとは・・・　チィッ！》
ゲンムは舌打ち混じりに撤退する。
「へっ、どうだ・・・　ぐっ!?」
ゲンムに勝利し、息を抜いた瞬間想像を絶する痛みがレーザーの体を襲い、そのまま膝をついて倒れる。
『貴理矢様！周りに人はいませんから早くガシャットを抜いて変身解除を！』
「うおっ!?ぬあっ！」
ナフェールの指示通り、貴理矢は何とかガシャットを抜き取ってレ

バーを閉めて変身を解除する。
「はっ・・・ はは・・・ これは・・・ キツいなぁ・・・」
だがその直後に全身を途方もない脱力感が襲い、バタンとその場に倒れ込む。自分の名前を呼ぶナフェールの声を聞きながら、貴理矢は思った。
（へへっ、やったぜ・・・ 愛香、総二・・・・）

「どぅおりゃあああああ!!」
テイルブルーの気合い一閃。振り回す槍が戦闘員を蹴散らす。それでも尚人海戦術で襲い掛かる戦闘員に時には蹴りや拳で対応しながらブルーはトゥアールに問う。
「後何体?」
「大分少なくなりましたよ!後１２０体です!」
「充分多い!こうなったらまとめてやってやるわ!」
次の瞬間ブルーは最大出力でオーラピラーを発動させる。広範囲の大波が戦闘員達を巻き込み拘束していく。
「エグセキュートウェェェェェェェイブ!!」
ブルーの放った槍が戦闘員を一人残らず殲滅する。大爆発を背に、ブルーは肩を下ろす。流石に大技を連発したせいかブルーの変身が解け、愛香が力無く倒れる。だが、倒れ込む前にトゥアールが愛香を支える。
（そーじ・・・・ 後は任せたわよ・・・・。）
薄れゆく意識で愛香はそう思った。

「うおりゃあああああ!!」
「ぬぅぅぅぅぅぅん!!」
テイルレッドとツインテールとなり本気を出したドラグギルディの猛烈な死闘も佳境に差し掛かっていた。自らがツインテールになる。恥も外聞も関係無し、堂々とした姿にレッドは感心し、感動すら覚え女体化して照れていた己を恥じもした。打ち合う度に衝撃波が

周りの地形を変えていく。レッドも応戦するがやはり一日の長でドラグギルディが粘りを見せ段々レッドを押していく。
「流石はテイルレッドだ！そのツインテールの軌跡！敵ながら惚れ惚れするわ！」
「俺も！敵じゃなければお前みたいな馬鹿とツインテールについて何時までも語り合いたかったぜ！」
　例え劣勢でレッドは強気で攻めた。一瞬でも弱気を見せれば負けてしまうと全身で感じたからだ。
「けど！ツインテールを奪う事は許さない！なぁ！平和的に物事を解決するつもりはないか!?」
「我ら生まれた時より奪う者よ！怨み言等聞き慣れたわ！」
「だろうな！そう言うと思ったぜ！」
「テイルレッドオオオオオオ!!」
　一層ドラグギルディの猛攻が激しくなる。レッドも徐々に圧されていき、そしてついにドラグギルディの剣がレッドの剣を弾き飛ばす。
「勝ったッ！さらばだテイルレッド！幼き武士よ！」
　ドラグギルディが勝利を確信し剣を振り上げた瞬間、レッドもまた勝利を確信し、ニヤリと笑う。フォースリボンをタッチし、二刀目の剣を取り出す。
「二刀流だとぉ!?」
「伊達にツインテールじゃねぇんだよ!!」
　そしてそのまま気合い一閃。レッドの全力を込めた一閃がドラグギルディの胴を裂いた。そしてそのままレッドは炎を噴き出しながら天高く翔び、ドラグギルディに斬りかかる。
「グランド！ブレイザァァァァァァァ!!」
「テイルレッドオオオオオオ！」
　一閃。テイルレッドの一撃は真っ向唐竹割りよろしくドラグギルディを切り裂いた。
「・・・・見事、見事だテイルレッド。」
「・・・敵ながら天晴れな奴だぜ・・・！」

ドラグギルディの身体に電流が弾ける。もう永くはないだろう。
「また来世（いつ）か会おうぞ・・・ !!」
「お前がツインテールを愛するならまた逢うかもな・・・ !」
ドラグギルディはゆっくりと背中から崩れ落ちる。レッドは振り返らなかった。
「さらばだ・・・ !」
爆発を背に受けながら、レッドは剣をしまいドラグギルディが生きた証、属性力を手に取り言った。
「俺達の・・・ 勝ちだ・・・ !」

Ｓｅｅ ｙｏｕ Ｎｅｘｔ Ｇａｍｅ・・・

俺、戦いを終えて／動き出すＳｔｏｒｙ

「そういや、総二。お前の母さんの属性力ってなんだろうな。」
「あ、確かに。私も気になる。」
「やめてくれ・・・ 想像したくない・・・・。」
　ドラグギルディとゲンムとの死闘から1日開けて学校へと続く道を歩きながら総二、愛香、貴理矢の三人は話をしていた。
「それにしても貴理矢。体大丈夫なのか？やっぱ安静に・・・」
「あー、気にすんなって。ちょっと痛むけどへーきへーき。」
　そう言う貴理矢の体のあちこちには包帯が巻かれ、顔面の右頬には絆創膏が張ってある。昨日の激闘の末、貴理矢は気絶したためナフェールによって回収され治療を施されたのだ。
「そーじ。貴理矢もこんくらいでくたばる様なタマじゃないわよ。結構鍛えてんだから。」
「そーそー。どこかの蛮族さんにしごかれてるからなー。」
「誰かしらねー。」
　ケラケラ笑う貴理矢に愛香の一撃が襲いかかる。貴理矢は咄嗟にかわすとあわてて総二を盾にするように総二の後ろに隠れる。
「あぶねーじゃねーか！俺怪我人だぞ怪我人！」
「ちょっと！そーじどいて！」
「無茶言うなっておい!?」
　ワチャワチャし始める二人に巻き込まれながら総二はふと笑みを溢す。この何気ない日常に今は浸るのは悪くないかもしれない。
「こら！逃げるな貴理矢！」
「ちょっ、マジでヤバいってあ。」
　と思った次の瞬間愛香の貴理矢を狙った拳が誤って総二の顔面にめり込む。暗転する視界の中総二は思った。後で説教だ、と。
「ぐっ、ふぅー、おのれ。レーザー・・・ ！あんな隠し玉を用意していた

とは…。」
　隠れ家の一つである研究室で痛む体を押さえながら椅子にもたれ掛かる一人の青年がいた。その黒髪はボサボサになり、その顔には脂汗が浮かんでいる。
「今エレメリアンどもの基地に戻るのは不味いな…　一人でおめおめ逃げ帰ったとなればあの単細胞共が騒ぎ立てるだろうな…　レーザーめ…　！」
　ひとしきりレーザーに対して悪態をついて、大きく深呼吸をする。そしてニヤリと笑みを浮かべる。
「まぁ良い…　まだ時間はある…。」
「何一人で笑ってんのよ。」
　青年は間髪入れずに声の主にバグヴァイザーの銃口を向ける。が、向けられた声の主を見てすぐにバグヴァイザーを下ろして一息つく。
「何だパラドか…。驚かさないでくれ。」
　パラドと呼ばれた声の主…　全身を黒い服でコーディネートしたサイドテールの少女は一瞬とは言え銃口を向けられたにも関わらず手をヒラヒラさせて笑いながら青年に話し掛ける。
「負けちゃったねぇヒロト。大丈夫なの？私のガシャットの開発とかさ。」
「…　今回は勝ちをくれてやっただけだ。それに君のガシャットの開発には更なる実験データが必要だ。」
「早くしてよねー。アタシも遊びたいし。」
「気長に待ちたまえ。」
　ヒロトは立ち上がり、懐から何も描かれていない白いガシャットを取り出す。
「このガシャットが完成する頃には君のガシャットも出来ているさ。」
　総二達の家の地下の研究室で一人、ナフェールは自前のツールでガシャットに情報を打ち込んでいた。そのツールに刺されたガシャット、〝プロトギリギリチャンバラ〟に今回の戦闘で得たデータを打ち込み、副作用を抑え安定して戦闘を継続出来るようにさせるためだ。

ナフェールが作業を中止して、腕を伸ばして背伸びをすると背後からトゥアールがコップに入った珈琲をナフェールのデスクの上に置く。
「根を詰めるのは良くありませんよ？」
「・・・ ありがとうございますトゥアール。」
笑顔を向けるトゥアールにナフェールは顔を俯かせる。トゥアールは近くの椅子に腰かけて自分の珈琲に口をつけてナフェールに尋ねる。
「そのガシャット。完成しそうですか？」
「・・・ はい。貴理矢様のお陰で何とかデータが集まりましたので・・・・。」
「ガシャットってゲームがモチーフなんですよね。」
「ええ。そうですが・・・」
今更何を・・・ と思うナフェールにトゥアールが一つのゲームソフトをナフェールに差し出す。
「では。今度これをモチーフに開発してくれませんか!?」
「？え、これ・・・」
ナフェールはトゥアールが差し出したゲームソフトのパッケージのイラストを見て絶句する。肌色多目の少女達が多数描かれた、要するにギャルゲーのソフトだったからだ。
「・・・ 多分作れたとしても貴理矢様絶対使わないと思うんですけど・・・・。」
「大丈夫ですって！私も付き合いますから！いやむしろ共同開発しましょう！」
「ええ・・・・」
「まずコンセプトはですねぇ・・・」
用意していたのかバッと設計図及び資料を取り出して嬉しそうに説明し始めるトゥアールを見ながらナフェールはズキッと心の痛みを感じる。
（トゥアール・・・・）
一瞬に悲しそうな顔をするが、すぐにいつもの顔に戻り嬉しそうに

話すトゥアールの説明をナフェールは聞く。だってそれがせめてもの償いになると思ったからだ。

To be Continued……

俺、部活動を始めます／不揃いのｍｅｍｂｅｒｓ

　エレメリアン前線基地の作戦会議室は異常なまでに殺気立っていた。空気はピリピリと震え一触即発の雰囲気が辺りに流れる。原因は二つ。一つはドラグギルディがツインテイルズに倒されたのにも関わらずおめおめ逃げ帰ってきたゲンムがいる事。もう一つはドラグギルディ亡き今その遺志を継いでツインテイルズに挑むも破れ去っていく侵略部隊を見かねて送り出された増援部隊の隊長二人が睨み合っている事だ。イカのような姿の怪人、クラーケギルディと海竜のような外見のバハムートギルディ、二者が凄まじい眼光で互いを睨み合っている。
「クラーケギルディよ。未だに貧乳こそが正義と化石にも等しい古臭い考えを持っているのか。今や巨乳こそが絶対正義の時代であると言うのに。」
　バハムートギルディの侮蔑的な言葉にクラーケギルディ側の何人かが殺気立つがクラーケギルディはそれを手で制し毅然と言い返す。
「貧乳こそが絶対正義と言うのは昔から続く不変的な事実なのだバハムートギルディ。そもそもツインテールに似合うのは貧乳だと言う事実を頑なに認めようとはしない貴様に哀れみすら覚える。」
「それが時代遅れだと言うのだクラーケギルディ。至高の属性ツインテールに似合うのは同じく至高の属性である巨乳属性（ラージバスト）なのだ。成熟した身体にツインテールのアンバランスな佇まいが至高だと」
「ただの年増なだけだろ。」
「今何て言ったコラァ!!」
　クラーケギルディの部下が放った心無い一言によりとうとう乱闘騒ぎが起こってしまう。
　その様子を眺めながらゲンムは雀のような姿の部隊の古株であるエレメリアン、スワロウギルディに尋ねる。
《‥‥　処罰を聞きに来たのに私は何を見せられているのだ？》
「‥‥　むぅ。返す言葉もない‥‥‥。」

二人がなんともまぁ醜い争いを見ていると、対立しつつも微動だにしなかったクラーケギルディとバハムートギルディが一喝する。
「えぇい！静まれぇい！」
その鋭く一喝により、さっきまでケンカしていた両部隊のエレメリアン達はピタッと止まり、自ずと離れていく。
「すまんな。部下が見苦しい所を見せた。」
バハムートギルディがスワロウギルディに謝る。そしてクラーケギルディがゲンムに言う。
「貴様の処罰の件だが、貴様には謹慎処分を命じる。」
《・・・・ふん。》
ゲンムはそれだけ聞くとさっさと部屋に戻ってしまう。
「ではまずは我々巨乳部隊からツインテイルズに宣戦布告をさせてもらおう。」
「ふん。好きにするがいい。」
バハムートギルディの言葉をクラーケギルディは了承する。バハムートギルディはそれを聞くとパチンと指を鳴らし、一人の戦士を呼び出す。
「ではバッファローギルディ。貴様が先陣を切るのだ！」

「・・・・ツインテール部ってお前なぁ・・・・。」
「いやー、書いてみるもんだな。」
学園の空き教室で貴理矢のツッコミに総二は何故か自慢気に答える。
「て言うかよくｇｏサイン出たわね・・・　。」
愛香も呆れながら頭を押さえる。そう、総二が入学式当日にやらかしてしまったツインテール部が何故か受理されてしまったのだ。
「しかもアンタはアンタでワケわからん事するしな。」
「うっ・・・」
貴理矢の視線の先には学生服姿のトゥアールとナフェールがいる。ちなみにトゥアールは入ってきて早々愛香のバイオレンスなツッコ

ミでグロッキーになっている。
「だって・・・ 私達も学生生活をエンジョイしたいんですもの・・・」
「だからってナフェールちゃんも巻き込むなよ。」
「あ、いえ！私は大丈夫ですので・・・」
　等とやっているとコンコンと部屋がノックされる。総二が対応しようとドアを開ける。
「はーい。どなたでしょう」
「生徒会長の神堂慧理那です。ツインテール部の視察に参りました。」
「か、会長!?」
　総二がテンパる中、神堂会長とお付きのメイドの桜川尊さんが入ってくる。
「む、観束と三条ではないか。さっきのＨＲ振りだな。」
「え、ええ・・・。」
「そうですね・・・。」
　二人は露骨に距離を取り始める。桜川さんは何故か急に代わった担任でもあり、しかも挨拶が終わった早々に男子全員に婚姻届けを配り無理矢理印鑑を押させようとしたのだ。婚期を逃して大分焦っているらしいが苦手意識を持つなと言う方が無理だ。
「気が変わったらいつでも良いんだぞ。」
「いえ！大丈夫です！」
　二人が声を揃えて拒絶する中、キョロキョロと部屋を観察していた神堂会長が総二に尋ねる。
「観束君はツインテールがそれほどまでにお好きなのですか？」
「え？ええ。大好きです。ツインテール好きになるのに理由はいりませんから。な、貴理矢。」
「自分に振るな自分に。最近お前のせいで自分までイロモノ扱いされかけてるんだぞ。」
「やっぱり何か問題が？」
　愛香の問いに一瞬神堂会長は顔を曇らせるが、すぐにもとの表情に戻る。
「いえ、この活動がツインテイルズの応援に繋がるのであれば構いま

せん・・・ あら？」
　神堂会長は観束の手首を指差して言う。
「あら、観束君。部室とは言え校内での派手なアクセサリーは禁止ですよ？」
「!?」
　認識撹乱装置で見えないハズのテイルブレスを見破られた事に全員が驚く中、神堂会長はしげしげとそれを見つめている。
「テイルレッドとお揃いのものですね。今回は見逃しますが、次からはキチンと守ってくださいね？」
「え、えぇ・・・ はい。気を付けます。」
「それから転校生のお二方。ようこそ陽月学園に。素敵な学園生活を。」
　そう言って神堂会長と桜川さんが部室から去ると同時に愛香がトゥアールの胸ぐらを掴む。
「ちょっと！どういうことよ！テイルブレスバレてるじゃない！」
「ひぇぇぇぇぇ!?そんな！確かに認識撹乱装置は正常に起動させたんです!?」
「と、取り敢えず後でお二人のテイルブレスは念のためメンテナンスにかけますから・・・。」
　必死になってナフェールがトゥアールを愛香の魔の手から逃れさせようとしていると、ピロロロンと軽快な音楽が鳴る。ナフェールがポケットから携帯のようなデバイスを取りだし、三人に言う。
「エレメリアンが現れました!!」
「何だって!?」
「またお出ましって訳ね。」
「自分いる？」
「貴理矢さんは念のため皆さんのサポートに回って頂きます。それと、プロトガシャットを改良した正規ガシャットが完成したのでこれを。」
　ナフェールが貴理矢に絵の部分にキチンとカラーリングが施された〝ギリギリチャンバラガシャット〟を渡す。

「お、サンキュー！よっしゃ！行くぜ！」
総二と愛香はテイルブレスを着けた腕を構え、そして貴理矢はガシャットをゲーマドライバーに差し込む。
「テイルオン!!」
「変身！」
教室が光に包まれ、三人の戦士が出撃した。

そこはグラビアアイドルのオープンコンテスト会場だった。エレメリアンの襲来により、水着姿のアイドル達が悲鳴を上げてポヨンポヨンと胸を揺らして逃げ回る。
「おっほ！良いもの見させて頂いたなレッド！」
「何言ってんだレーザー…」
嬉しそうに逃げ回るアイドル達の一部分をレーザーが目で追っているとガシッとハンドル部分をブルーに掴まれる。
「死にたくなかったら… エレメリアンを倒すことに集中しなさい… ？」
「わ、わかった！わかったから離せ、離してくださいブルー様ァァァァァ!?」
目の前に広がる巨乳にコンプレックスを爆発させたヤバい目をしたブルーはポイとレーザーを放り捨てる。
「ブルーが怖ぇよ…」
「そんな発言するから…」
「むっ！現れたなツインテイルズ！」
等とやっていると巨体の牛のようなエレメリアンが現れる。そのエレメリアンは重圧感たっぷりに佇む。
「我が名はバッファローギルディ！我が愛する巨乳属性を世に広めんとする主の懐刀なり！さぁいざ尋常に立ち合えテイルレッド！」
「なら受けて」
「まぁ待てレッド。」
飛び出そうとしたレッドをレーザーが片手で制する制する。
「お前のブレス。認識撹乱装置もアレだったしもしかしたら不具合が

あるかも知れねぇ。ここは自分に任せろ。」
「レーザー・・・」
「悪いが、選手交替だ。三速、変身。」
『ガシャット！ガッチャーン！レベルアップ！ギリ・ギリ・ギリ・ギリ・チャンバラ～！』
　レーザーがガシャットを差し込んでレバーを開くと灰色の部分が金色になったギリギリチャンバラゲーマーが現れ、レーザーレベル1の装甲が弾け飛び、同じく手足のパーツに分かれたギリギリチャンバラゲーマーが胴体に接続される。そして最後に仮面が装着され、レーザーレベル3，チャンバラバイクゲーマーが完成する。
「ふぃー、やっぱ人型の方が落ち着くぜ。」
「・・・　中身どうなってんの？」
『企業秘密です。』
　レッドの問いにナフェールが答える中、レーザーは灰色からピンク色に塗装されたガシャコンスパローを取り出す。
「さぁーて、レッドと遊びたきゃ自分を倒してから行きな！」
「上等だ！貴様ごとき即座に打ち倒し巨乳属性の私がテイルレッドを打ち倒してくれるわ！」
「ちょっと待て！さっきから私をスルーするんじゃないわよ！」
「何か言ったかタイラブルー。」
「たっ・・・　!?」
　水を刺されてシラケたと言わんばかりにバッファローギルディはやれやれと肩を竦める。
「私は巨乳属性なのだ。貴様のような大地に対して九十度を保つこれ以上成長の見込みの無い貧乳を相手にしている暇など無い。」
　地雷源でタップダンスを踊りまくるバッファローギルディを見ながらレッドとレーザーが恐怖で震える。後ろで怒髪天をついているブルーが容易に想像出来たからだ。
「巨乳属性・・・　？」
　特定のワードにブルーが反応する。恐る恐るレーザーとレッドがブルーに振り返る。そこには修羅と化した蛮族がいた。思わずレー

ザーの口からヒェッと悲鳴が漏れる。その瞬間修羅と化したブルーは超スピードで一気にバッファローギルディと距離を詰めると槍でバッファローギルディの胴を薙ぐ。
「ごっふぉ!?」
「寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ!!アンタの属性力を私に寄越せえええええ!!」
そしてさらにブルーは勢いそのままバッファローギルディの顔面に飛び膝蹴りをかまし、バッファローギルディを倒すとその上に跨がってマウントポジションで怒涛の拳を雨霰と浴びせる。
「さっきから貧乳貧乳うるせぇんだよぉぉぉぉぉぉ!!」
どこの世界に怒号と怨念を撒き散らしながら悪鬼の如く敵の肉をえぐり骨を砕く正義の味方が何処にいるのだろうか。戦いと言うには余りの一方的かつ凄惨なリンチにレーザーとレッドは抱き合って震える。
「や、やべぇブルーがキレた・・・。」
二人が怯える中、ブルーは散々タコ殴りにされて息も絶え絶えなバッファローギルディの土手っ腹に槍を突き刺しゼロ距離で直接エネルギーを流し込む。
「エグゼキュートウェェェェェェェイブッ!!」
「くっ、お、おのれ!巨乳に栄光ぎゃあああああ!?」
エネルギーを流し込まれバッファローギルディが爆散する。もうもうと煙が立ち込めるが、次第に煙が晴れるとそこにはまるで首を掲げて勝利の凱旋を上げる武将の如く巨乳属性の属性玉を掴んだテイルブルーがいた。
「これで・・・ !これでアタシも貧乳から脱却よ!ハハハハ!アッーハハハハハ!」
高笑いをするブルーを見ながらレーザーがレッドにボソッと話し掛ける。
「・・・ これどっちが悪役か分かったもんじゃないな。」
「しっー!」
閑散とした会場にブルーの笑いがこだまする中、レッドとレーザー

は早く帰りたいと心から思った。

To be continued……

俺、困惑します／ままならないＴｒｏｕｂｌｅ

「なんでよぉーーー!?」
　残虐の限りを尽くしてバッファローギルディを倒したテイルブルー、愛香の悲鳴に似た慟哭が基地に響く。
「なぁ・・・・ 愛香。」
「やっぱ無理なんじゃね？その属性玉使うの。」
　今、テイルブルーに変身した愛香は基地のトレーニングルームのような場所で先程手に入れた属性玉〝巨乳属性〟を使おうと躍起になっているが、ウンともスンとも言わない。その様子を見ている総二と貴理矢は若干憐れみが入った様子でテイルブルーを見る。
「そんなことは無いハズ・・・・ ！トゥアール！ナフェール！どういうことよコレェ!!」
「あー、はいはい。それ多分能力発現のための属性力の濃度が薄いんだと思います。」
「は!?」
　トゥアールはそのまま愛香に話を続ける。若干見下した感じで。
「要するにあのエレメリアンには〝巨乳属性〟以外にも属性力があったんですよ。人間だって趣味は只一つって訳では無いでしょう？つまり、起動に７５％の濃度が必要だとしたらその〝属性玉〟はそこまでの濃度が無いんですよ。つまりどう足掻いたって愛香さんはまな板の」
　セリフの途中で愛香のグーパンがトゥアールに炸裂する。しかもテイルブルー状態の。
　トゥアールは切り揉みしながらぶっ飛んで壁に叩きつけられる。ナフェールが慌ててトゥアールの元に駆け寄り、今にもトゥアールを殺しかねない愛香を総二と貴理矢が止めにかかる。
「きゃあああ!?トゥアール大丈夫ですか!?」
「・・・ 普通変身した状態で殴ります？かふっ」
「落ち着け愛香！流石にテイルギア纏って生身の人間にパンチは不味いって!!」

「うっさいわね!!余計な事を言うアイツが悪いのよ!!」
「分からんことは無いけど取り敢えずテイルギアは解除してやれ！」
　等と五人がワチャワチャしていると鶴の一声が入る。
「あらあら元気ねぇ。お母さんも混ぜて欲しいわぁ。」
「母さんが入るとややこしくなるからやめてってええええええ!?」
　いつの間にかいた母、未春の方に振り向いた総二が声をあげる。なにせそこには悪の大幹部風な奇抜な格好をした母がいたからだ。
「あぁ・・・　いつものか・・・。」
「え?そうなんですか!?」
　別に今に始まったことではないので貴理矢達は驚かないが、ナフェールが驚嘆の色を見せる。
「トゥアールちゃん。その〝属性力〟が愛香ちゃんのテイルギアで起動しないなら一から新しく作っちゃえば良いじゃない。」
　未春の提案にトゥアールはゆっくり立ち上がりながら答える。生まれたての子鹿の如くめっちゃ足震えてるけど。
「そうですね・・・　前の戦いでテイルギアを精製出来る位大きな〝属性力を〟手に入れましたし。戦力増強の観点からすればアリですね。」
　大きな属性力とは貴理矢がゲンムと死闘を繰り広げていた一方で総二と愛香が交戦したドラグギルディのことである。
「え?新しく作れるのか?」
「はい。テイルギアを精製するに値する容量の〝属性力〟さえ手に入れば。」
「そのギアが出来たら私も巨乳に・・・・　?」
　未春の提案に今まで絶望の只中にいた愛香が希望の輝きを見せる。が、そんな事散々愛香に暴虐の限りを尽くされた(大体自業自得)トゥアールがそう簡単に許すハズもなく。
「残念ですけどこのテイルギアを作るとは私は一言も言ってませんよ?そうですね、作って欲しければ土下座して今までの事を謝罪して」
「今まですみませんでしたトゥアール様。」
「ひっいいいいい!?間髪入れず!?割り切り過ぎですよこの蛮族!?」
　言い切っても無いのにトゥアールの要求に間髪入れずに土下座を

敢行して謝罪する愛香に流石のトゥアールも気味悪がる。ここで別に良いですよ作りますと言えば平和なのであるが、トゥアールは一瞬気味悪がったもののすぐに悪い顔をして土下座している愛香の頭を踏んづけながら今までの借りを返すと言わんばかりに言う。
「そこまで頼まれちゃあしょうがないですねぇ。けどその間、私の言うこと何でも聞いてくれるなら作ってあげてもいいですよぉ？」
「・・・・ 分かりました。何でも聞きます。」
「あ、言いましたね！聞きましたよねナフェール！今なんでもって！」
「あの・・・ それ位にしといた方が」
「え？良いんですよぉ！私と愛香さんは友達ですし！」
流石にやりすぎだとやんわり諌めるナフェールにガハハと鬼の首を取ったように笑うトゥアールの足元で総二と貴理矢は滅茶苦茶歯を食いしばって怒りを必死に押さえ込んでいる愛香の表情を見逃さなかった。何故そこまで巨乳に拘るのか。そんなプライドを捨てててまで巨乳になりたいのか。分からないが取り敢えずテイルギアが完成したら血の雨が降ることだけは確かだと二人は確信した。

「トゥアール。相談したい事とは？」
あの一件の後、トゥアールに呼び出されたナフェールが部屋に入るとトゥアールはテイルギアを律儀に制作している手を一旦止めるとナフェールに向き合う。その目はいつになく真剣だ。
「ナフェール。・・・ この世界に来てから、やたら私によそよそしいですが、どうかしたのですか？」
「え」
ナフェールが少し驚いたような顔をする。だが、トゥアールは一瞬ナフェールの顔が悲しそうになったのを見逃さなかった。
「前の時は確かに貴女は大人しい性格でしたが今ほどオドオドしていませんでした。・・・ 何か私に隠していますか？」
「いやっ・・・ そんなっ・・・ ！ことは・・・・」
何かに怯えるように否定するナフェールを見て、トゥアールは嘆息して、優しい声音でナフェールに言う。

「大丈夫です。無理には聞きません。ですがこれだけは言わせて下さい。なにがあっても私は貴女を嫌いになったりしません。」
「トゥアール・・・」
　トゥアールの言葉にナフェールは泣きそうになる。こんな私に本当にそんな言葉をかけてくれるのか?と。
「んで、本題に入りますけど。」
「え。」
　今までのシリアスな空気から急に切り替えられて困惑するナフェールにトゥアールはガサゴソと何やら資料を取り出して渡す。
「ガシャットってゲームが持ちネタですよね。」
「えぇ・・・ まぁそうですけど。」
「じゃあこれ!これで作って下さい!要望も書いてありますから!」
　渡された資料を読み進めていく内にナフェールの顔に苦笑いが浮かぶ。
「あの・・・ これ貴理矢さん怒ると思うんですけど・・・。」
「大丈夫ですって!ね!ね!」
　なにが大丈夫なのか。具体的根拠は無い大丈夫にナフェールは嘆息しながら呟く。
「ホントにも~・・・ 貴女って人は・・・ よくわかりません。」
「ふふっ。よく言われます」

「ねぇ~ヒロトォ~。暇だよ~。心が燻る・・・。」
「・・・ 君には昨日新しいゲームを与えたハズだが?」
「あんなの1日やりこんだら大体全クリしたよ~。」
　エレメリアン基地の一室でパソコンに向かって何やら作業をしているヒロトにパラドが暇だ暇だと文句をブー垂れる。ヒロトはやれやれと作業を一時中止してパラドに向き合う。
「やれやれ・・・ なら明日地球でゲーム好きなのを買ってくれれば良い。私も同行するから。」
　まるで幼い子供をあやすような言い方だが、パラドは特に気にもせ

ず目を輝かせて笑顔になって言う。
「ホントに!?流石仮面ライダーゲンム!話が分かる!心が踊るなぁ!」
「調子の良い奴め・・・・。」
喜ぶパラドを見てため息をつくとゲンムはクルリとパソコンに向き直りカタカタと作業を再開する。
「この私の神の才能の具現化とも言えるガシャットを完成させなくては・・・。」
ヒロトのパソコンにはケーブルが繋がっており、ケーブルの先には真っ白なガシャットが差し込んであった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・

俺、新たなる戦いの予感／Ｈａｐｐｎｉｎｇなガシャット

ショッピングモール「マクシーム宙果」そこの駐車場は怪人とその戦闘員達によって阿鼻叫喚となっていた。
「クッハハハハハ!!さぁ出てこいツインテイルズ!!このクラブギルディが相手だ！」
蟹のような怪人、クラブギルディが名乗りを上げ今にもツインテールの少女に手を伸ばそうとした瞬間その手から火花が散る。
「うおっ!?」
「そこまでだ!!」
クラブギルディや戦闘員達が声がした方に眼を向けるとそこには二人の少女と一人の鎧武者がいた。
「ツインテイルズだ!!」
「ｗｉｔｈ　レーザー！」
「現れたなツインテイルズ！」
ツインテイルズが地上に降り立つと同時に戦闘員が襲い掛かるが、レッドはブレイザーブレイドを、ブルーはウェイブランサーを、レーザーはガシャコンスパローを振るい戦闘員をあっという間に打ち倒す。
「やるなツインテイルズ!!我の名はクラブギルディ!!ツインテールと共にあるうなじ（ナーブ）属性を探求するものなり!!」
クラブギルディが戦闘体勢に入り、三人も身構えた瞬間一声が間に割って入る。
「待てーい!!抜け駆けは許さんぞクラブギルディ!!」
「ぬっ、貴様は谷間（バレー）属性ロブスターギルディ!!」
今度はエビのような姿のエレメリアンが姿を現す。ロブスターギルディはクラブギルディとツインテイルズの間に割り込むようにぐいぐい入ってくる。
「・・・　もう一匹増えたわよ。」

「どうする？」
「あのエビは自分が受け持とう。カニは任せた！」
『ならば貴理矢さん！新しいレベル４のガシャットが出来ましたのでお使い下さい!!』
「え？トゥアール？」
　レーザーのオペレーターはナフェールが担当していた部分があったのでトゥアールからの通信に少し困惑するが、レーザーの右手にピンクのガシャットが転送される。
　というかさっきからナフェール全く喋ってない気がする。
「なんか引っ掛かるがまぁ行くぜ。四速！」
〈ときめき♡ツインテール！〉
〈ガッシューン〉
　レーザーはギリギリチャンバラのガシャットを抜くと代わりに送られたガシャットを挿す。
〈レベルアップ！爆走！独走！激走！暴走！爆走バイーク!!アガッチャッ　ドリーミンガール!!恋のシミュレーション！乙女はいつもときめき♡ツインテール〉
　次の瞬間レーザーの装甲が弾けピンクのメッシュが入り黒が混じった金髪の髪をツインテールにまとめ、レーザーと思わしき装甲を纏い、八重歯が覗く少女が現れる。
　まるでサナギを破った蝶の誕生を連想させる登場に敵味方関係なく全員が固まる。
「おっ、体がいつもより軽いな。心なし解放感もあってまるでスーツを着てない感じ。」
　自分の体に起こった出来事に只一人気付いてないレーザーが体の感触を確かめている中レッドがレーザーに話し掛ける。
「れ、レーザー？」
「どうしたレッド？アレ？お前なんかでかくなった？」
「鏡…」
「…　鏡ってんだよ自分に何が」
　レッドの指示に訝みながらも車のガラスに写った自分の姿を見た

瞬間レーザーが固まる。
　その後胸を少々揉んで体を触りながら自分の異常を認識しつつ男の象徴がある部分を触って、見下ろして。
「アレェ!?ねぇぞ!?!」
　慟哭。崩れるレーザーに気の毒そうな視線を向けるレッド。うんうん。だよな。それが当然の反応だよな。
『やはり私の目に狂いはありませんでした!!』
「トゥアールなにしたの・・・？」
『貴理矢さんから微弱ながらツインテール属性を感じたのでナフェールの協力の元、ガシャットとテイルブレスの技術を融合させた新しいガシャットを作りましたぐへへ』
「えっ。貴理矢が？」
　レッドがレーザーに振り替える。そうか。とうとう貴理矢もツインテールの魅力に気づいたか、とでも言いたげな視線を向けながら。
『まぁ多分総二様の強大なツインテール属性に影響を受けたのが原因ではないかと』
「お前のせいじゃねーか!!」
「い、いやごめんって・・・」
　と二人が揉めている突然レーザーの胸にブルーの手が伸びレーザーの双丘を鷲掴みにする。
「な、ん、で、あんたは胸があるのよぉぉぉぉぉぉ」
「いだだだだだだだだ!?」
　怨嗟の声を響かせながらブルーの握力が強くなる。確かにレーザーの胸は巨乳とまでは行かないがDカップ、普乳位のサイズはある。
「おごごごご!!ぶ、ブルー様!!敵！敵はアッチ!!」
　レーザーが指を指す先にはクラブギルディとロブスターギルディがいる。
「むっ。まさかあのオマケ、実はツインテールだったのか!?」
「巨乳とまではいかないがツインテイルズの中ではトップクラスのバストサイズ!!まさかこのような隠し玉があるとはこのロブスターギ

ルディも見抜けなんだわ！」
「馬鹿ばっかりか!!ナフェール！ナフェールゥゥゥ」
レーザーの声が虚しく空に木霊する。一方のナフェールは。
「むー」
トゥアールの行動を止められるのを防止するために猿轡噛まされて横に転がされていた。

俺、慣れない戦い／ｆａｉｌｉｎｇな俺

なんとかブルーの魔の手から逃れレーザーはロブスターギルティと対面する。もう一方ではレッドとブルーが対峙している。先程テイルブルーに鷲掴みにされた胸がまだヒリヒリ痛む。どんだけ強い力で握ったんだアイツと思わず貴理矢は悪態をつく。

「じゃれあいは済んだか？」

「言ってくれるじゃねぇかテメェ・・・」

腕を組こちらを見下ろすロブスターギルティにレーザーは負けじと睨み返す。しかしこのエレメリアンやたらデカイ。体格だけなら映像で見たドラグギルディに匹敵するのではないだろうか。

「クソデケェガタイしやがって首が疲れるだろうが」

「ふん。当然だ。何故なら私は谷間属性のロブスターギルディ！女性の谷間を見るために執念の試練を積んだ成果がこの体よ！」

・・・偉そうに言ってるがとどのつまり女性の谷間を見るために身長を伸ばしたらしい。あまりの下らない理由にコケそうになるがレーザーはガシャコンスパローをカマモードに変形させロブスターギルティに突っ込む。

「さっさと終わらせてやるぜ!!」

レーザーが凪ぎ払うように振ったガシャコンスパローがロブスターギルディに当たる瞬間。カァン!!という甲高い音と火花を散りスパローの一撃は弾かれる。

「んなッ」

ならばとスパローをさらに振りかぶり攻撃を続けるが全てロブスターギルディの甲羅の前に弾かれてしまう。

「かった!!硬いな！」

「ふはははは!!当然だ！谷間を見るということは正面に立つこと！何者にも邪魔されない防御を持つのは自然のことよ!!」

どうやら身長だけでなく防御力も極限に鍛え上げているらしい。悔しいがレーザーにはレッドやブルー程の瞬間火力はない。不利な相手と当たっちまったとレーザーは顔をしかめる。

「先程から貴様の胸の狂喜乱舞する様を見せて貰ったが・・・ わずかに物足りぬと思ったが中々どうして・・・ 予想以上に良い。思わず絶頂するところであったわ!!」
「ストレートにキモいな!!」
　とは言ったものの状況的に不利であることに変わらない。大人しく援護を求めようかと二人の方を見るが。
「ふはははは!!これは素晴らしいうなじだ!!まさしく美の結晶!」
「うわぁぁぁぁ!!変態だぁぁぁぁ!!」
　やたらすばしっこく動くクラブギルディにあちらも苦戦しているようだ。
　これでは援護は見込めないだろう。
「さぁどうしたレーザーとやら!もう終わりか!」
「な訳ないだろ!」
　正面からの攻撃では恐らくロブスターギルディの装甲は抜けないと踏んだレーザーはガシャコンスパローを連結させ弓モードにすると上空に向けて矢を放つ。
「ふん。どこを狙ってる!!」
「秘密だよ!」
　レーザーは今度は矢をロブスターギルディに向けて放つ。しかし予想通りと言うべきか全てにべもなく弾かれてしまう。
「無駄だ!お前の攻撃では我の甲羅は砕けんよ!」
　ロブスターギルディも反撃に転じそのハサミを振り下ろすがレーザーはヒラリとそれを回避する。軽装になった分レベル3と比べて機動力に優れているようだ。
　目標を失ったハサミは地面を砕く。レーザーはそのままお返しと蹴りを放つが甲羅を砕くには至らない。
「かった!!」
「効かんよ!!」
　あまりの固さに思わず怯んでしまったところにロブスターギルディの腕が伸びレーザーはベアハッグのように捕まってしまう。
「しまっ!?」

「捕まえたぞ！さぁじっくりと谷間を観察させてもらおうか！」
ロブスターギルディがなんとか抜け出そうともがくレーザーを押さえながら谷間を見ようと首を傾けた瞬間。
後頭部に衝撃。意識外からの一撃にロブスターギルディはよろめく。
「なっ・・・!?」
「見下ろすのは慣れてても見下ろされるのには慣れなかったみたいだな！」
先程レーザーが初撃で放った矢が重力に引かれ落ちてきたのだ。ロブスターギルディの拘束が緩んだ瞬間にレーザーはその腕をはね除けヤクザキックをかますとそのまま後ろな下がって距離を取りながらガシャットをガシャコンスパローに差し込む。
「悪いが自分は高くつくぜ!!」
《ガシャット！キメワザ！ギリギリ！クリティカルフィニッシュ!!》
ガシャコンスパローから放たれた大きな矢は上空に飛ぶと弾けて数千の矢となり頭上からロブスターギルディを襲う。
「ぬぅおぅわぁぁぁぁぁぁぁ!?!!き、巨乳に栄光あれぇぇぇぇぇ!!」
頭上から降り注ぐ数千の矢にロブスターギルディは貫かれそのまま爆散する。
「ふぃ～。あー、終わった・・・・」
『お疲れ様です貴理矢様。』
へたりこむレーザーにナフェールから通信が来る。
「あれ？ナフェールちゃん今まで何してたの？」
『すみません。トゥアールを止めようとしたのですが逆に止められてしまっていて・・・』
ナフェールが申し訳無さそうに言う。だろうな、と貴理矢が思っていると。
「うなじぃあああああ!?」
クラブギルディが悲痛な叫びと共に爆散する。どうやらあっちも終わったらしい。
レーザーは大きく息を吐くと大の字にゴロンと寝転がってナ

フェールに言う。
「悪いけどナフェールちゃん転送してくれ。疲れた・・・」
『は、はい今すぐ。』
　転送の光に包まれながらレーザーは目を閉じて思考にふける。
さぁどうやってトゥアールの奴にお仕置きしてやろうか。

「やっば！ゲンム見た!?女の子になってたよアイツ！」
「・・・ なんだアレ」
　きゃっきゃっと笑いながらパラドがバシバシとヒロトの肩を叩く。
新しいゲームが欲しいとパラドがごねたのでお忍びでコッソリと地上に降りていた二人はたまたまエレメリアンの襲撃に巻き込まれつつツインテイルズｖｓエレメリアンの戦いを観戦していたのだ。
「あー、面白いなぁ！早く参戦したいよー!!」
「君のはまだ完成まで程遠いからしばらく待ちたまえ」
　ヒロトがそう言うとパラドはぶーと不満げになる。そんな彼女を見てヒロトは彼女に言う。
「君には君の舞台に出るタイミングがある。楽しみに待つのも手だ。」
「・・・ 主役は遅れてやってくるって奴だね！」
　その言葉に向かい合って二人はニヤリと笑みを浮かべる。底の見えない野望を燃やしながら。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・